

## [論文]

# 詩人・村松武司とハンセン病問題

—栗生楽泉園機関誌『高原』における詩の選評を中心として—

木村 哲也（国立ハンセン病資料館）

## 要旨

本論文は、国によるハンセン病隔離政策下において、療養所の外部からハンセン病患者・回復者と関わりをもった詩人・村松武司（1924-1993）に焦点を当て、ハンセン病問題の解決に向けてどのような実践・思索が生み出されたのかを解明するものである。村松は、1950年代から国立療養所栗生楽泉園に通い、同園機関誌『高原』の詩の選者を1965年1月から1992年12月まで務めた。そこで本論では、『高原』に寄せた村松の全テキスト314篇の分析を通して、彼がいかにハンセン病をめぐる諸問題への認識を深めていったのかを考察することを主題とする。分析の結果、①外国人入所者や失明者などの詩を取り上げ、ハンセン病文学における新たな意義を付け加えたこと。②ハンセン病問題の解決を「全体性の回復」と新たに定義づけることで、病者が病気から回復するだけでなく、私たちの側が偏見・差別にとらわれている状態から回復する必要があると示したこと。③ハンセン病の文学は、書き手の経験の固有性を貫くことで、文学としての普遍性を併せ持つと考えると同時に、安易な共感や一体感を拒絶し、書き手と読み手の隔たりを自覚したうえで相互理解に至る道筋を考えつづけたこと。以上3点が明らかとなった。

キーワード：

詩人／村松武司／ハンセン病文学／自殺／望郷／ボディ・イメージ／「全体性の回復」／在日外国人／失明者

## Poet Takeshi Muramatsu and the Issue of Hansen's Disease:

Focusing on His Poetry Reviews in *Kōgen*, the Journal of the National Hansen's Disease Sanatorium Kuriu Rakusenen

Tetsuya KIMURA

## Abstract

This paper examines the poet Takeshi Muramatsu (1924–1993), who engaged with people affected by Hansen's disease from outside the sanatorium system during Japan's government-enforced segregation policy. The study explores the practices and philosophical insights he developed in addressing the issue of Hansen's disease.

Muramatsu regularly visited Kuriu Rakusenen from the 1950s onward and served as the poetry editor for the sanatorium's journal, *Kōgen*, from January 1965 to December 1992. This paper focuses on an analysis of all 314 texts he contributed to *Kōgen*, examining how his awareness of issues surrounding Hansen's disease deepened over time. The findings reveal three key aspects:

1. Muramatsu expanded the significance of Hansen's disease literature by highlighting poetry written by residents of foreign origin and blind individuals within the sanatorium.
2. He redefined the resolution of Hansen's disease-related issues as the "restoration of wholeness," emphasizing that recovery is not only about the patients overcoming their illness but also about society freeing itself from the constraints of prejudice and discrimination.
3. He argued that Hansen's disease literature, by staying true to the unique experiences of its writers, achieves literary universality. At the same time, he rejected simplistic empathy or identification, instead advocating for an awareness of the gap between writer and reader as a foundation for mutual understanding.

## Keywords

poet / Takeshi Muramatsu / Hansen's disease literature / suicide / longing for home / body image / restoration of wholeness / foreign residents in Japan / blind individuals

---

## はじめに

本論文は、国によるハンセン病隔離政策下において、療養所の外部からハンセン病患者・回復者と関わりをもった知識人・文学者に焦点を当て、ハンセン病問題の解決に向けてどのような実践・思索が生み出されたのかを解明することを主題とする。ここでいうハンセン病問題とは、国による隔離政策によって、ハンセン病患者・回復者及びその家族に対して重大な人権侵害が引き起こされたことを指している。

取り上げるのは、詩人・<sup>むらまつたけし</sup>村松武司（1924-1993）である。村松は、植民地下朝鮮<sup>(1)</sup>の京城（現在のソウル）に、植民者三世として生まれた。戦後は詩を書く傍ら、栗生楽泉園機関誌『高原』の詩の選者として、1965年1月から1992年12月まで、四半世紀以上にわたってハンセン病の詩人たちと交流をつづけた人物である。

これまでの村松武司論では、そのいずれも村松が、朝鮮とハンセン病を生涯の主題としたことを指摘している<sup>(2)</sup>。

植民地時代の朝鮮に植民者三世として生まれ育ち、なつかしさの対象であるはずの「祖国」が、植

---

(1) 本論文では、固有名詞や引用箇所を除いて、「韓国／朝鮮」を区別せず「朝鮮」の語を使用する。

(2) 主な村松武司論として、以下のものがある。金時鐘「私の座位からの背中あわせの独白—村松武司『朝鮮植民者』に寄せて」（『朝鮮研究』第116号、1972年7月）3-7頁。龍田肇「書評 村松武司詩集『祖国を持つもの持たぬもの』（『新日本文学』第33巻第2号、1978年2月）108頁。岸部くみ「書評 村松武司著『遙かなる故郷—ライと朝鮮の文学』（『コリア評論』第22巻第210号、1979年8月）54-55頁。古賀誠三郎「書評 村松武司『遙かなる故郷—ライと朝鮮の文学』（『新日本文学』第34巻第8号、1979年8月）110-111頁。鶴見俊輔「この人」（『海のタリオン—村松武司著作集』皓星社、1994年）3頁。磯貝治良「村松武司の詩と朝鮮」（『新日本文学』第50巻第1号、1995年1月）71-80頁。黒川洋「書評 村松武司著作集『海のタリオン』植民者としての贖罪を背負って」（『新日本文学』第50巻第6号、1995年7月）115-116頁。森田進「詩人・村松武司における朝鮮とライ文学」（『研究紀要』第32号、恵泉女子学園短期大学英文学科、1999年）62-89頁。斎藤真理子「楳岡から円ヘーライ、朝鮮、村松武司」（『増補・遙かなる故郷—ライと朝鮮の文学』皓星社、2019年）293-303頁。

民地支配する者として生きた場所であることへの痛覚を、「原罪」として戦後も抱えつづけた<sup>(3)</sup>。この主題を掘り下げた代表作として、植民者一世であった祖父からの聞き書き『朝鮮植民者一ある明治人の生涯』（三省堂、1972年）がある。

加えて、戦後に出会ったハンセン病患者・回復者と親交を深めるなかで村松は<sup>(4)</sup>、日本が近代化を推進するにあたって切り捨てていったものが、朝鮮とハンセン病の二つであり、その問題は今もつづいているとの認識に至る。この主題を掘り下げたものとして、唯一の評論集『遙かなる故郷—ライと朝鮮の文学』（皓星社、1979年。2019年に増補版）がある。

そして、本業の詩でも、朝鮮をめぐる主題は、第一詩集『怖ろしいニンフたち』（同成社、1957年）、第二詩集『詩・朝鮮海峡』（小山書店、1960年）、第三詩集『朝鮮海峡 コロンの碑』（同成社、1965年）と反復され、第四詩集『祖国を持つもの持たぬもの』（同成者、1977年）にいたっては、朝鮮のみならず、ハンセン病、ベトナム、ヒロシマなどを叙事詩としてうたう自身の集大成ともいえる詩集となった。

『朝鮮植民者一ある明治人の生涯』は1972年、『祖国を持つもの持たぬもの』は1977年、『遙かなる故郷—ライと朝鮮の文学』は1979年の刊行である。1970年代に村松の代表作が集中しており、この時期が活動のピークと見なしていいであろう。その後、1960年代の日記風の詩を収載した『詩集・一九六〇年出発』（皓星社、1988年）を例外として、1993年に亡くなるまで同時代の活動を自身で単行本としてまとめることはなかった。

村松の死後、著作集を構想するメモが見つかり、その目次案にしたがって、既刊のすべての単行本7冊に、未刊の詩篇「海のタリヨン」と、未刊の評論「終りなき戦後」と「娼婦たちへの手紙」、そして『高原』での最初の選評「追体験のための自己紹介」を加えて一冊とし、『海のタリヨン—村松武司著作集』（皓星社、1994年）が刊行されている。

『海のタリヨン』は、巻末に年譜と著作目録がおさめられ、村松の仕事の全体像を知るにはかっこうの一冊だが、村松の仕事の中で重要な位置を占める『高原』における詩の選評については、著作目録の中で、「他に栗生楽泉園機関誌『高原』にて毎号詩評」<sup>(5)</sup>とあるのみで、正確な著作リストはこれまで作成されていない。

そこでこのたび、全国のハンセン病療養所機関誌の記事の横断検索を行ったところ、1958年から1992年まで、34年間のうちに314篇の記事の掲載が判明した（表「村松武司『高原』掲載作品リスト」）<sup>(6)</sup>。この表からは、これまで明らかにされてこなかった村松の仕事の質量をうかがうことができる<sup>(7)</sup>。

先に、村松の単行本からうかがえる仕事のピークが1970年代にあったことを確認したが、村松は、1993年に亡くなる前年まで『高原』誌上で詩の選と、ハンセン病患者たちの詩集出版の支援をつづけていた。単行本を通してだけでは見えてこない大きな仕事が、この時期に横たわっている。そこで本論

(3) 村松は、植民地時代の朝鮮で、自分の親が経営する店に入りりしていた丁稚の少年の性器が3センチしかないことをからかって、かれの日本名を「三吉」と名付ける。その少年は黙って耐え、その後三年間、その日本名を名乗りつづけた。そのことへの罪悪感と悔恨を、戦後になって記している。村松武司「黒いゲーム（一）—創氏改名」（村松武司『増補・遙かなる故郷—ライと朝鮮の文学』皓星社、2019年）12-14頁（初出は、『朝鮮文学』第11号、1970年1月）。

(4) 村松がそもそもハンセン病問題と出会ったきっかけは、のちに『高原』初代の詩の選者となる詩人・大江満雄と1949年夏に出会ったことによる。村松武司「ライの中の朝鮮（1）」（『高原』第27巻第3号、1971年3月）3頁。初出は『朝鮮研究』第90号、1969年11月。

(5) 前掲「村松武司著作目録③」606頁。

(6) 表の作成については、国立ハンセン病資料館のホームページ内にある「機関誌検索」によって行った。全国の療養所機関誌の横断検索ができる。<https://www.nhdm.jp/library/>

(7) 特徴的なのは、村松の場合、複数の療養所機関誌への寄稿はなく、栗生楽泉園の機関誌『高原』のみへの寄稿に限られる点である。例えば、同時代にハンセン病療養所の詩の選者として関わった詩人・大江満雄が1952年から1991年まで『甲田の裾』『新生』『高原』『山桜』『多磨』『愛生』『楓』『青松』『恵楓』『始良野』のように、療養所と関わった文学者としてはおそらく最も多い9園の機関誌に文章を寄せている。また詩人・永瀬清子が1949年から1973年まで『愛生』『楓』『青松』の3園の機関誌に寄稿していることなどと比べても、30年以上の長きにわたって療養所と関わりを持ちながら、たったひとつの療養所のみと関係をつづけたことは顕著な特徴といえよう（その要因については、筆者は断定的にいうだけの根拠を持ち合わせていない。今後の課題としたい）。

では、『高原』に寄せた村松武司のテキストの分析を通して、村松がいかにハンセン病患者・回復者の詩を通じて、ハンセン病をめぐる諸問題への認識を深めていったのかを考察することを主題とする。

なお、引用中に、現在の人権意識に照らして不適切な語句・表現が見られるが、原文の時代背景を考慮してそのままとした。また、引用中の／は改行、〔 〕は筆者による補足である。

## 1. その活動

選評の検討に入る前に、本章では、村松武司が、栗生楽泉園の詩人たちとどのような仕方で関わりを持ったのかを簡単に振り返っておく。

### 1) 『高原』の詩の選者として

先に述べたように、村松武司は、栗生楽泉園の機関誌『高原』誌上で、1965年1月から1992年12月まで、27年以上にわたって詩の選者を務めた。詩の選者としては、詩人・大江満雄、井手則雄に次ぐ三代目の選者であった。

第1回目の選評には、「追体験のための自己紹介」とタイトルが付されている<sup>(8)</sup>。そこで村松は、「いまも私は加害者です」といい、「あなた方の体験を追体験できない」という。「わたしのまずしい体験が、あなた方の追体験をなし得ず、あなた方の悲劇に及ばぬとき、わたしとあなた方との闘いには、いぜんとして深い淵が横たわつている」と、彼我の隔たりの自覚を記す。そして「わたしが、あなた方との間に横たわる河と崖を越えるとするならば、植民者、軍人、その他もろもろの、自分の現代史のなかの古き勝利、新しき受益的立場とたたかうこと以外にありませんまい」と自らの心構えを述べるのであった。

ここから村松が、安易な共感や一体感を強く拒否する立場をとっていることがわかる。このような立場から、どのような相互理解が可能なのか？ 本論で村松を取り上げる意義も、この問いを解くためにあるといってもよい。

村松武司が詩の選者を務めた期間に、『高原』誌上に詩を発表していた主な書き手は、以下の14名である<sup>(9)</sup>。最初の〔 〕内は生まれた年、次に『高原』誌上に詩を発表した期間、最後に、書き手が詩を発表した最初と最後の年齢を示し、発表時期が早い者から記載している<sup>(10)</sup>。

こだまゆうじ  
笈 雄二 (1932年) 1952年4月～1981年1月 20歳～49歳

こしかずと  
越一人 (1931年) 1953年9月～2007年7月 22歳～76歳

コンスタンチン・トロチエフ (1928年) 1954年7月～1999年5月 26歳～71歳

かとうさぶろう  
加藤三郎 (1910年) 1955年1月～2006年9月 45歳～96歳

たけうちしんのすけ  
武内慎之助 (1908年) 1955年4月～1973年7月 47歳～65歳

こばやしひろあき  
小林弘明 (1925年) 1956年7月～1999年12月 31歳～74歳

たけむらのぼる  
竹村昇 (1917年) 1957年4月～1979年8月 40歳～62歳

ふるかわときお  
古川時夫 (1918年) 1958年1月～1990年7月 40歳～72歳

すずきときじ  
鈴木時治 (1926年) 1960年3月～1994年9月 34歳～68歳

たかのこんごう  
高野金剛 (1913年) 1965年6月～1979年1月 52歳～66歳

かやますえこ  
香山末子 (1922年) 1976年9月～1996年8月 54歳～74歳

(8) 村松武司「追体験のための自己紹介」(『高原』第20巻第1号、1965年1月) 22-23頁。

(9) これがすべてではないが、詩欄における常連の詩人を選び出した。

(10) 生年については、「著者紹介」『ハンセン病文学全集6 詩一』(皓星社、2003年)、『同7 詩二』(皓星社、2004年)を参照した。

藤田三四郎 (1926年) 1977年2月～2016年10月 51歳～90歳

桜井哲夫 (1924年) 1983年11月～2009年11月 59歳～85歳

しらね虚舟〔星政治〕(1919年) 1984年1月～2001年5月 65歳～82歳

ここから二つのことがいえる。まず、村松が選者になる1965年より前から詩を発表している9人は、1950年代以降に、20代～40代という比較的若い年齢で詩を発表し始めている世代だが、他の療養所では、この世代の文学活動が1960年代～1970年代にかけて次第に停滞期に入り<sup>(11)</sup>、活動が維持できなくなるケースも見られるなかで、『高原』では、村松が選者となった期間に詩の活動が持続したことである。

そしてもう一つは、村松が選評を始めた1965年以降に、詩を書き始めたメンバーが5人おり、いずれも50代～60代と、壮年期・老年期になって村松との出会いから詩作を開始していることである。これは他園と比較した時に、際立った特徴といえる。

## 2) 出版への協力者として

栗生楽泉園の詩人たちとの関わりは、園内にとどまるものではなかった。かれら(「彼／彼女」の区別なく「かれ」と表記する)の詩を編集し、詩集として出版したり、出版された詩集に序文・跋文などを執筆したりした。村松によるものは、以下のとおり少なくとも13冊にのぼる。

「消えゆくライ(その文化を誰がうけつぐか)」(栗生詩話会『くまざさの実』栗生楽泉園慰安会、1973年)。古川時夫『歌集・身不知柿』(梨花書房、1976年)<sup>(12)</sup>。「跋」(小林弘明『闇の中の木立』梨花書房、1979年)。「持たざるものを書く」(栗生詩話会『骨片文字』皓星社、1980年)。「ひとりのアリラン」(香山末子『草津アリラン』梨花書房、1983年)。「『違い鷹羽』について」(越一人『違い鷹羽』創樹社、1985年)。「望郷」(『トラジの詩』編集委員会『トラジの詩』皓星社、1987年)。「雪道を走る人」(藤田三四郎『方舟の權』皓星社、1988年)。「桜井哲夫の詩」(桜井哲夫『草津の子守唄』編集工房ノア、1988年)。「小林弘明の第二詩集について」(小林弘明『ズボンの話』私家版、1989年)。「末子の詩の美しさ」(香山末子『鶯の啼く地獄谷』皓星社、1991年)。「はじめに」(『藤田三四郎詩集』青磁社、1992年)。「どんな村か?」(加藤三郎『僕らの村』皓星社、1992年)。

このうち、梨花書房は、村松が1976年に、ハンセン病と朝鮮の文学を出版すべく設立した出版社であった<sup>(13)</sup>。この出版社から、上記のうち三冊を出していることも特筆される。

また、1960年代以降、先述したように全国のハンセン病療養所の文芸活動が停滞してゆくなかで、ハンセン病療養所入所者による文学作品を、継続的に世に出しつつけたことも、注目されてよい。

その療養所の作品を外部的に紹介しつづける実践は、隔離政策を定めたい予防法が1996年に廃止される直前まで、隔離の壁を越えるべく、継続されたことが確認できるのである。

## 3) 教養講座の講師として

村松による実践のあり方として、栗生楽泉園の教養講座の講師を務めたことも挙げておきたい。

そもそも教養講座は、インドの詩人タゴールが、民族や宗教、階級の対立を超える学習の場として設立したタゴール国際大学にならい、入所者がさまざまな立場を超えて共に学ぶ場をつくらうと、大

(11) 塔和子「園内文芸のよどみ」(『青松』第20巻第1号、1963年1月)36-37頁。堂崎しげる「時流の中で」(『楓』第34巻第4号、1971年4月)12-14頁。前者は大島青松園、後者は邑久光明園の詩サークルの衰退の様子が述べられている。その要因として、軽症の患者が社会復帰を前提として生活し出したこと、テレビの普及で娯楽が多様化したことが挙げられている。

(12) 黒川洋「村松武司年譜」『海のタリオン』(皓星社、1994年)602頁には、村松が古川時夫『歌集・身不知柿』(梨花書房、1976年)に解説を書いたことになっているが、実際には掲載がない。

(13) 前掲、黒川洋「村松武司年譜」602頁。

江満雄<sup>えみつお</sup>の提案により、1953年3月に創設された<sup>(14)</sup>。「在園者の教養を高め常識を養う為」という目的が掲げられ、1958年10月までの5年間にのべ84人の講師を招いた記録が残っている<sup>(15)</sup>。

正式な活動の終了以後も、外部から講師を招いた文化講演会などを、教養講座と呼びならわす習慣がつづいたようで、村松を講師とする教養講座が、1969年6月13日と14日、1978年6月4日、1985年5月12日、1987年6月7日、1989年6月10日に開催された記録が残っている<sup>(16)</sup>。

当時の写真を見ると、村松は、講堂のような高い壇上から講演をするのではなく、療養所の入所者と膝を突き合わせて語るスタイルを採っていることがわかる<sup>(17)</sup>。

時には、在日朝鮮人の文学者、高史明・李恢成・鄭敬謨・姜舜らを同行している<sup>(18)</sup>。それについて村松は、「ここにいる朝鮮の友だちと共に考えたい。共にたたかいたい。〔略〕根底にあるのは二つの違ったものが偶然に出会ったとき何が生れるかということです」<sup>(19)</sup>と述べており、ハンセン病療養所の詩人たちとの新たな出会いに期待していたことがうかがえる。村松は、詩の選評のような机上の仕事だけでなく、隔離の壁の内外を越えた出会いの橋渡しを担い、自ら行動して実現する実践者の側面も持っていたことがわかるのである。

#### 4) 自作詩を通して

村松は、『高原』誌上に2篇、自作詩を寄せている。

自作詩「ある朝」は、1960年4月の発表であり、『高原』で選者を引き受ける5年前の作品である。一部を抜粋する。

「あなたがたは癩者で、かなしみの最後の人だから／いつそう前方をみようとする／ほくらも、その力で、前方をみよう。／そこは広場になつていて／無数の椅子が並べられているだろう」<sup>(20)</sup>。

ハンセン病を病んだ人たちの悲しみが、前に進む力になる、というとらえ方をしている。そして、村松もまた、その力を借りて前方を見ようとする姿勢を見せる。「広場」の「椅子」は、みなが座って対話を開始する場所を暗示しているかのようだ。

もう一篇の自作詩「詩話幻聴」は、1982年10月の発表である。選者となってから17年が経過しており、その間の親交の深まりのあらわれか、古川時夫という具体的な入所者の詩人の名前も出てくる。作品は、蟬の音が聞こえる場面から始まる。「あれは陽が射したところで鳴くから／山の上の雲が動いてゆくのがよくわかる」と、失明者ならではの聴覚で、蟬の声を聴きながら雲の動きまでを把握していることが描かれる。その後、村松は詩人たちの前で話をする。「〔蟬の音が〕きこえませんか／たずねると詩人たちは／いま鳴いているのですか、と怪訝である」<sup>(21)</sup>と、村松と聞き手とが理解し合えない様子が描かれる。ハンセン病療養所入所者との交流と断絶、その双方を描き、その溝を埋めるための対話を開始する手前の場面で詩は終わる。

(14) 大江満雄「『アジア大学』のゆめ」(木村哲也編『癩者の憲章—大江満雄ハンセン病論集』大月書店、2008年)175-177頁。初出は、『大倭』第28号、1967年10月11月12月合併号。

(15) 栗生楽泉園患者自治会編『風雪の紋 栗生楽泉園患者50年史』(栗生楽泉園患者自治会、1982年)383-387頁。

(16) 村松武司「教養講座・詩の出版(1)六月—三日・一四日栗生楽泉園にて」『高原』第25巻第10号、1969年10月。村松武司「教養講座・詩の出版(2)」『高原』第25巻第11号、1969年11月。村松武司「教養講座「詩はなぜ書くか」」『高原』第34巻第9号、1978年9月。村松武司「〔教養講座〕詩と風景」『高原』第41巻第10号、1985年10月。村松武司「教養講座・即身文学論」『高原』第43巻第10号、1987年10月。村松武司「教養講座・朝鮮の獄—獄を超えるはなし」『高原』第45巻第10号、1989年10月。『高原』に記録が掲載されたのは以上となるが、村松が来園して入所者と懇談する機会はこの以外にもあったと考えられる。

(17) 前掲、村松武司「〔教養講座〕詩と風景」16頁に、教養講座の開催風景を写した写真が掲載されている。

(18) 李恢成「一番大きなところで結びつきたい」、鄭敬謨「なにを学んではならないか」、姜舜「皆さんの心境に触れて」いずれも『高原』第30巻第1号1974年1月。高史明「〔教養講座〕歎異抄について(一)~(四)」『高原』第37巻第2号、1981年2月~第37巻第5号1981年5月。

(19) 村松武司「二つのものめぐりあい」(『高原』第30巻第1号、1974年1月)11頁。

(20) 村松武司「ある朝」(『高原』第15巻第4号、1960年4月)13頁。

(21) 村松武司「詩話幻聴」(『高原』第38巻第10号、1982年10月)内表紙。

このほか、教養講座の席上で、自作詩「少年の旅 その一」「その二」という未発表の詩を、朗読した記録が残っている<sup>(22)</sup>。

また、詩集『祖国を持つもの持たぬもの』には、植民者であった自分自身を描くほか、栗生楽泉園の詩人であるトロチェフと古川時夫の名前が登場する<sup>(23)</sup>。

村松は、『高原』を必ずしも自作詩の旺盛な発表の場としていたわけではなかったが、以上で見たように、ハンセン病療養所の人びとと共に学びたいという意思や、彼我の理解の齟齬への自覚から相互理解へと向かう姿勢など、重要な場面を作品として残すこととなった。

## 2. 選評—四つのキーワードをめぐって

本章では、村松による『高原』誌上の詩の選評を検討する。

内容の検討に入る前に、選評における村松の姿勢を簡単に振り返っておく。差し当たって「励まし」、「批判・直言」、「対話的」の3点を挙げ得る。

まず、最初の特徴は書き手への「励まし」である。例えば在日朝鮮人であった香山末子への言葉を引いてみよう。「香山さんの「身世打鈴（しんせたりょん＝韓国婦人の身上話）」を書きつづけてほしい<sup>(24)</sup>。「作者が自分だけが持つことのできる夢を、詩にたくさん書いてほしい」<sup>(25)</sup>。このように、作者が示した詩の方向を伸ばすような温かなコメントをしている。ある時は、「どうかこの作品を療園の外の人々に知らせてほしい。〔略〕詩が盲人にとって光に替わるものになりかけているそのこと。香山さん、あなたはいちばん大事な事を言っている」<sup>(26)</sup>と、熱量のこもった言葉を送っている。

一方で、書き手への「批判・直言」も厭わなかった。例えば次のようなコメントにそれを見ることが出来る。「世界、宇宙、命など観念性が強い。もう少し暗示的に柔かくなならないだろうか」<sup>(27)</sup>と、再考を促す。あるいは、「青森原子核再燃工場問題〔。〕内容的にはしっかりした批判、作者の立場も見える。ただ、詩はこのようであってはならないという気がわたしにはある。たとえばこの詩をつぎのように替えたらどうであろうか」<sup>(28)</sup>と、村松自ら具体的に詩を書き直して示すことまでしている。これらはいずれも1990年代の選評であり、詩の選者を四半世紀以上も務めた信頼関係の積み重ねに裏打ちされたものでもあろう。

そして最後に、「対話的」であること。例えば「今月の詩のなかで、この作品をとくに注意して読んでいただきたいと思う」<sup>(29)</sup>と呼びかけ、書き手個人とのやりとりに終わらせず、詩話会全員と問題を共有したいとの姿勢を見せる。また、「完全にちかい詩的構成」の詩を書いてきた作者が、前回は「構成美とはちがった、なまなましさ」を表現していたことを引き合いに出して、「作者にとって、どちらに満足するものだろうかを問うてみたい」<sup>(30)</sup>と、問いかける。あるいは、「この詩は、本当に難しい。皆さんの意見を求めます」<sup>(31)</sup>というように、独断を下すことを避け、詩話会のメンバーに意見を求めることもあった。

(22) 村松武司「教養講座・朝鮮の獄—獄を超える話」(『高原』第45巻第10号、1989年10月) 9-10頁。

(23) 村松武司『祖国を持つもの持たぬもの』(同成社、1977年) 81、93頁。

(24) 香山末子「六月二十四日」(『高原』第34巻第5号、1978年5月) 6-7頁への評。村松武司「身世打鈴(身の上ばなし)」(同上) 9頁。

(25) 香山末子「夢の中で」(『高原』第36巻第4号、1980年5月) 12頁への評。村松武司「夢のなかの映像」(同上) 13頁。

(26) 香山すえ子「闇の中にも花がほしい」(『高原』第45巻第10号、1989年10月) 19頁への評。村松武司「闇の中の花とはなにか」(同上) 21頁。

(27) 桜井哲夫「窓」(『高原』第47巻第8号、1991年8月) 13頁への評。村松武司「老境次第」(同上) 16頁。

(28) 桜井哲夫「嵐」(『高原』第48巻第2号、1992年2月) 14頁への評。村松武司「評」(同上) 15-16頁。

(29) K・トロチェフ「ナガサキシばらく」(『高原』第21巻第5号、1966年5月) 17頁への評。村松武司「選評」(同上) 19頁。

(30) 越一人「雪」(『高原』第29巻第11号、1973年11月) 31頁への評。村松武司「選評」(同上) 31頁。

(31) 藤田三四郎「ふるさとの味」(『高原』第47巻第7号、1991年7月) 23-24頁への評。村松武司「腰を据えた作品」(同上) 25頁。

× × ×

さて、いよいよ選評の内容の検討である。

村松は栗生楽泉園の詩の選評を通して、いくつかのテーマを探り当てている。

1978年6月4日、栗生楽泉園の教養講座で「詩はなぜ書くか」と題して栗生詩話会のメンバーを前に話をし、「皆さんの文芸を解くキーワードです。一つは自殺、二つは望郷、そこへ三つ目にボデーイメージを加えたい」と三つの特徴を述べている<sup>(32)</sup>。このように、栗生楽泉園の詩人たちとの語らいの機会が、ハンセン病文学に関する重要な思索の場となったことがわかるのである。

さらにその5か月後の1978年11月に、「遥かなる故郷」という評論を発表し、ハンセン病文学を理解するうえでキーワードとなるのが、自殺、望郷、ボディ・イメージに加えて、全体性の回復への願い、の四つであることを指摘している<sup>(33)</sup>。

この四つのキーワードについては、従来の村松論の中でも、森田進<sup>もりたすすむ</sup>が注目して論じているが<sup>(34)</sup>、本論では、これまで誰もが無検討であった『高原』における詩の選評を中心に、それらのキーワードをめぐってどのような思索が展開されたのかを見ていきたい。

## 1) 自殺

戦前のハンセン病文学の代表的作家である北條民雄<sup>ほうじょうたみお</sup>の小説には、自殺を肯定したり、実際に自殺を試みて果たせなかったりした人物が登場する。村松は、これらを指して「死の影をひきずりながらこうしてライ文学は出発した」と、評している<sup>(35)</sup>。

村松はハンセン病の知友から「われわれのなかで、一度でも自殺を図らなかったものはなかった」と聞かされ、「自殺は、いま彼らが書く文学のなかに、頻度ゼロにちかくかくされたキーワードとして存在する」と指摘している<sup>(36)</sup>。

『高原』の詩の選評で取り上げられた詩のなかに、自殺を主題とした作品はけっして多いとはいえない。少ない例のひとつに、1974年発表の小林弘明による「和解」という詩がある<sup>(37)</sup>。

母親がわが子の首に手をまわし「許しておくれ」といい、少年は恐怖の中で耐える。それはその後も何度も繰り返された。だが、どうしてその迷路を抜け出したのか、当時の少年は大人となって今は微笑みさえ浮かべて白い包帯を巻いている。このような詩だ。

村松は選評で「これについての感想をのべることは、〔略〕難しく」と述べるにとどまっている<sup>(38)</sup>。しかし、その4年後の1978年、先に述べた評論「遥かなる故郷」で、小林の「和解」を再度取り上げ、改めて次のように論じている。

「例外なく図った自殺を、失敗、克服していま彼らは生きている。それを、どうして迷路を抜けたか知らないと、小林弘明は言う。いま彼らの平均年齢は六〇歳に近い。これから書きつづけても一〇年、長くて一五年だろうか。かくして日本からライは消えるだろう。消えるために、自らが自らを消すために彼らは、このような言葉を残してゆく。それは自分のためではないのかもしれない。自殺と消滅を期してなお、目指すものがある。それはライの回復ではない。すべての、全体的回復である」<sup>(39)</sup>。

(32) 村松武司「教養講座・詩はなぜ書くか」(『高原』第34巻第9号、1978年9月) 25頁。

(33) 村松武司「遥かなる故郷—ライ者の文学」『コスモス』第60号、1978年11月。引用は村松武司『増補・遥かなる故郷 ライと朝鮮の文学』(皓星社、2019年) 124頁。

(34) 森田進「詩人・村松武司における朝鮮とライ文学」(『研究紀要』第32号、恵泉女子学園短期大学英文学科、1999年)。森田も参考文献に村松の『高原』における詩の選評を挙げてはいるが、本文での引用はない。

(35) 前掲、村松武司「遥かなる故郷」131頁。

(36) 同前、132頁。

(37) 小林弘明「和解」(『高原』第30巻第8号、1974年9月) 22-24頁。

(38) 村松武司「詩をよんで」(『高原』第30巻第8号、1974年9月) 26頁。

(39) 前掲、村松武司「遥かなる故郷」132頁。



明らかに思索を深めた形跡がうかがえるだろう。この思索の出発点には、『高原』の詩の選評があり、当初は「これについての感想をのべることは、〔略〕難しく」と評価を保留していたにもかかわらず、その後もこの主題を掘り下げて考えつづける姿が浮かび上がってくるのである。

また、ここで結論として示された「全体的回復」については、村松がハンセン病文学に見る四つの特徴の一つとして挙げている主題でもある。これについては本章4節で検討することとする。

## 2) 望郷

村松が取り上げて見せたハンセン病文学を読み解く四つのキーワードのうち、その二つ目は「望郷」という主題である。

隔離政策によって一般社会から切り離された入所者にとって、故郷や家族は文学の主要なテーマであった。『高原』にもそうした題材で多くの作品が書かれている。

例えば、越一人「夏色のふるさと」<sup>(40)</sup>の評を見てみよう。村松は「佐渡が見えると誰かが言う。だが自分には見えない。見えない視力で対象を求め、幻影を見る」と、視力を失いつつある作者が、故郷を精一杯見ようとする姿勢に注目する<sup>(41)</sup>。

あるいは、桜井哲夫「消印のない手紙」<sup>(42)</sup>。母を恋い慕うあまり、作者は、故郷の「文盲」の母に架空の手紙を書く。その手紙には宛先もない、消印もない。そして返事も来ない。そういった詩だ。この作品を評して村松は、「作者は盲人で、母は字を知らなかった。その悲しさを超えて、この想像上の手紙は胸をうつほど優しい」と述べる<sup>(43)</sup>。

このような望郷の思いは、すべての入所者に共通するものであろうが、とりわけ村松が注目しているのが、朝鮮人入所者の詩である。先に述べたように、ハンセン病と朝鮮の問題を終生の主題とした村松にとって、ハンセン病療養所に入所している朝鮮人の詩人との出会いは、重要な意味をもたらした。

村松が、初めてハンセン病と朝鮮の問題を重ねて論じたのは、1969年11月に発表した「ライのなかの朝鮮」ではないかと思われる<sup>(44)</sup>。これは、『高原』誌にも転載されており、栗生楽泉園の入所者の目にも届いたであろう<sup>(45)</sup>。

転載の理由を村松は、「個人的批判にとどまらず、皆さんの前に立たされる覚悟をきめたからです。非ライ者の日本人の書く文字などに、おれたちのくるしみがうつしだせるものか、という声に、まともに向きあわなければならないと思います」という覚悟を述べている<sup>(46)</sup>。

文章の冒頭で村松は、笹雄二の詩「祖国へ」を引用し、そのなかに、きんがくしゅん きム ハイル金岳俊（金夏日として知られる）というハンセン病を病む失明した朝鮮人の青年の名前が登場することに注目している。そして、ハンセン病療養所入所者に朝鮮人が多くいることを知り、村松自身が朝鮮植民者であった過去と重ねて、ハンセン病と朝鮮という主題を発見してゆくのである。

この「ライのなかの朝鮮」の冒頭のテキストは、笹雄二の詩「祖国へ」が載った『高原』の選評とほぼ同一であり<sup>(47)</sup>、もとは『高原』の選評が思索の出発点であったことが裏付けられる。

村松が「ライのなかの朝鮮」の連載を書き進めるにあたり、具体的な考察の対象としているのは、

(40) 越一人「夏色のふるさと」（『高原』第42巻第2号、1986年2月）13頁。

(41) 村松武司「イメージの確かさ」（『高原』第42巻第2号、1986年2月）16頁。

(42) 桜井哲夫「消印のない手紙」（『高原』1991年3月）17-18頁。

(43) 村松武司「優と勇」（『高原』1991年3月）20頁。

(44) 村松武司「ライのなかの朝鮮」『朝鮮研究』第90号～93号、1969年11月～1970年5月（全4回連載）。

(45) 村松武司「ライの中の朝鮮」『高原』第27巻第3号～第27巻第5号、1971年3月～5月（全3回連載）。

(46) 村松武司「ライの中の朝鮮（1）」（『高原』第27巻第3号、1971年3月）2頁。

(47) 村松武司「選評」（『高原』第20巻第8号、1965年8月）23頁。

栗生楽泉園入所者で朝鮮人の歌人・金夏日である。この時点ではまだ、村松が選評を担当している詩人たちのなかに、朝鮮人の詩人はあらわれていなかった。

しかし、こののち、二人の朝鮮人の詩人が登場する。香山末子としらね虚舟である。次節では、これらの作品への選評から、村松がどのような思索を巡らせたのかをたどってみたい。

### (1) 香山末子の詩

香山末子（香山すえ子、金末子＝キムマルチャ、金末壬＝キムマルロク）は、1922年に現在の韓国慶尚南道晋陽郡晋城面温水里に生まれた。1941年、夫の後を追って来日。1942年に第一子、1944年に第二子を出産。同年発病し、1945年、第二子を背負って栗生楽泉園に入所した。1996年死去<sup>(48)</sup>。

香山は、ハンセン病患者・回復者であり、女性であり、朝鮮人であり、失明者であった。けっしてハンセン病患者・回復者という観点だけではとらえることのできない複数性、交差性を生きた人物であった。

『高原』には1976年9月から1996年8月まで、54歳から74歳のあいだ、詩を発表しつづけている。生前三冊の詩集『草津アリラン』（梨花書房、1983年）、『鶯の啼く地獄谷』（皓星社、1991年）、『青いめがね』（皓星社、1995年）と、没後一冊の詩集『エプロンのうた』（皓星社、2002年）が編まれている。それまでまったく詩を書いたことがなかったにもかかわらず、人生の晩年とっていい時期に、大変みずみずしい表現の作品を多数残した。

村松は、香山の詩の選評で、大きく分けて次のようなことを論じている。朝鮮人入所者にとっての故郷の意味と、新たな日本語文学の可能性である。

#### ①朝鮮人入所者にとっての故郷

香山末子「ふるさとの郵便」は、故郷朝鮮からの手紙をいくら待ってみても届かないことをうたう<sup>(49)</sup>。故郷にいるころは揃っていた五本指が、後遺症によりすっかりなくなってしまったことで、時間の経過と自らの境遇の変化を表現する。村松は、この作品を「ライと民族の問題が二重に描かれている」と評した<sup>(50)</sup>。ハンセン病と朝鮮の問題とは、村松自身が植民者の加害性への自覚として抱えた主題でもあるのだが、逆の立場から香山末子がこの問題を詩にうたうことを村松は評者として受け止めることとなった。

そのほか、紙幅の都合で詩の内容にまで立ち入れないが、村松の評のみを引くと以下のような言葉が目立つ。

「韓国人の生活、風習が手にとるように書かれている。〔略〕半世紀まえの追憶の詩である」<sup>(51)</sup>。

「あちら、というのは韓国、こちらというのは日本。作者は、みえない目で、食卓のうえのあちらこちらをいっしょに集めようとする。その在日の意味を考えさせる作品。〔略〕本国を忘れようとして忘れられずまた忘れぬよう胸に抱きながら、しかし遠去かる思いを、ここにこめている」<sup>(52)</sup>。

いくら遠い故郷の「韓国」を忘れ、日本人と一緒にになって笑って話しても、自分は水の上の油の一滴のようであり、まん丸く固まって、寒い風に吹かれ冷たい水が身に滲みると書く作者に、「寂しい。

(48) 「著者紹介」（『ハンセン病文学全集7 詩二』皓星社、2004年）564-565頁。

(49) 香山末子「ふるさとの郵便」（『高原』第36巻第2号、1980年3月）28頁。

(50) 村松武司「変身願望」（『高原』第36巻第2号、1980年3月）28頁。

(51) 香山末子「おじいさんの本」（『高原』第37巻第8号、1981年8月）19-20頁に対する選評。村松武司「寂しさの詩」（同上）21頁。

(52) 香山末子「朝鮮料理」（『高原』第40巻第9号、1984年9月）19-20頁に対する選評。村松武司「加藤さんの実験その他」（同上）21頁。

孤独な詩。作者にこのような作品を書かせて、わたくしたちは無力だ」という<sup>(53)</sup>。

「このひとが故郷を書くのはけっして惰性でないことがよくわかる」<sup>(54)</sup>と、作者にとって故郷の記憶を書きつづけることが、生きる支えとなっていることに注目する。

## ②新たな日本語文学の可能性

香山は植民地時代の朝鮮で生まれ、19歳で来日しているから、母語は朝鮮語である。しかし長い隔離政策のなかで次第に朝鮮語を忘れ、母語でない日本語で詩を書いた。そこで生み出される日本語は、香山が学校で学んだものではなく、生きる中で自分自身で獲得したものだ。そこで生み出される言語の創造性について村松は注目している。

「このような文章を肉声というのだろう。〔略〕作者の創作した日本語の傑作とっていい。このような肉声で呼びかける作者の詩に、真実を感じる」<sup>(55)</sup>。

「不自由な盲人に数年前のある日、詩が浮かんだ。口にするものすべてが、詩になったのは、言葉と生とのかかわりがわかったからだろう。注釈の要もあるまいが作者は朝鮮人で、在日の時間も長く、朝鮮語も忘れていた。だから言葉は、ここでは外国語としての日本語だ。それが表現となったとき、詩だと思った」<sup>(56)</sup>。

村松はここで、詩のことが創造される瞬間に立ち会っている。後述するロシア人のコンスタンチン・トロチェフにも同じことがいえる。日本人による閉じた日本文学ではなく、さまざまな出自の書き手に開かれた日本語文学を構想し得ること、また日本語は、日本人に生まれた者たちの独占所有物ではないことを、村松の選評は教えてくれるのである。

## (2) しらね虚舟の詩

しらね虚舟（星政治、朴湘錫＝パク・サンソク）は、1919年に現在の韓国慶尚北道義城郡北安面に生まれた。1944年、栗生楽泉園入所。『高原』に1984年1月から2001年5月まで、65歳から82歳にあたるあいだ、詩を発表している。2002年死去<sup>(57)</sup>。

ハンセン病療養所の在日朝鮮人入所者の劣悪な待遇を改善することを目的に1959年に結成された在日朝鮮人・韓国人ハ氏病患者同盟の委員長を、星政治の名前で務めている<sup>(58)</sup>。ハンセン病療養所の患者運動で知られる人物だが、65歳という老年になってから、主にしらね虚舟という筆名で詩を書くことを始めている。詩集を出さずに亡くなったので、『高原』誌をたどる以外に、かれが詩を書いたことすら知られることはないのではなかろうか<sup>(59)</sup>。

ここでも、紙幅の関係でしらねの詩作品を引用している余裕がないのだが、村松の選評から、その内容がわずかでもわかるよう努めた。

「自分たちの生活を侵してきた日本の近代、植民政策と、軍隊と権力などをあらわす。〔略〕しかし、果たして過去と<sup>(ママ)</sup>言うだけで済まされることであろうか。作者はおそらく現代の日韓について書いてい

(53) 香山すえ子「水の上の油一滴」（『高原』第42巻第2号、1986年2月）15頁に対する選評。村松武司「イメージのたしかさ」（同上）17頁。

(54) 香山すえ子「故里」（『高原』第47巻第5号、1991年5月）17-18頁に対する選評。村松武司「音の世界をさがす」（同上）19頁。

(55) 香山末子「真夏の入室」（『高原』第41巻第3号、1985年3月）9頁に対する評。村松武司「ひまわりと絶句」（同上）13頁。

(56) 香山すえ子「面白かった時代がなかなか来ない」（『高原』第47巻第10号、1991年10月）22頁に対する評。村松武司「印象的な「忘れ物」」（同上）24頁。

(57) 「著者紹介」（『ハンセン病文学全集4 記録・随筆』皓星社、2003年）777-778頁。

(58) 「同盟支部報」第1号、1961年5月20日（金貴粉編『在日朝鮮人ハンセン病資料1』緑蔭書房、2020年）3頁。

(59) 栗生楽泉園の朝鮮入所者による詩文集『トラジの詩』（皓星社、1987年）に、朴湘錫名義で詩と散文を発表しているが、掲載された詩が、しらね虚舟名義で『高原』を初出として発表されたものであることは明記されていない。

るのであろう」<sup>(60)</sup>と、日本による植民地政策が、けっして過ぎ去った過去の問題ではなく、いまだにその影響が生活を侵しつづけていることを作者は詩を通して訴えている。朝鮮への植民者であったことを自覚しつづけた村松は、正面からこの詩を受けとめている。

「この詩の前で、わたしは棒のように立ち、言葉を失う。〔略〕自分はあるときは日本人になり、あるときは朝鮮人になり、あるときは韓国人であった。それは自分の自由な選択ではなく、取引きされる牛馬のように扱われての結果であった。〔略〕じつは自分は死んだのだ、と彼は言う。しらね虚舟、しかしあなたは一人ではない、同じくるしみを耐える人々がいて、あなたを待っている」<sup>(61)</sup>。これも村松の他の書評と比べても異様な熱度で書かれている。異なる境涯の人たちにも、同じように苦しみを耐えて生きている人びとがいて、かれらにも作品は届くはずだと書き手を鼓舞している。

「これはたんに懐郷などという作品ではない。恨み、慟哭をもこめた懐郷であろう」<sup>(62)</sup>と、在日朝鮮人にとって、祖国を思うことは懐かしさだけでなく、恨みや慟哭を伴わざるを得ないのだということを、村松は丁寧に取り扱っている。

「朝鮮からサハリン、サハリンから内地、そして猫の啼く夜の草津。その過去はじつは日本と朝鮮の近代・現代史だ。〔略〕その記憶を描こうとするが記憶があきらかでない。幼な友だちの名を呼び戻すことができぬ。つまり自分をとり戻すこともできぬ。〔略〕自分は誰なのか、それを問うている」<sup>(63)</sup>。

しらねは、人生を総括するように、朝鮮からサハリン、サハリンから「内地」、そして草津の療養所へ、自らの経験と、朝鮮と日本の歴史の変転を叙事詩的にうたいあげている。村松はその告発の言葉を見まいとするのではなく、自分が加害の側にいることを真正面から受け止めている。村松の選評による応答がなかったら、こうした主題と表現の詩は残されなかったのではないかと思わせる。長い時間をかけて詩を書き、選評を受け、さらにそれに答えて詩を書くという相互の循環が、しらねに詩を書かせ、村松に思索に満ちた選評を書かせたといえるのではないだろうか。

### (3) コンスタンチン・トロチェフの詩

村松が「望郷」について考えるうえで、もう一つ大きな存在となったのが、ロシア人入所者のコンスタンチン・トロチェフである。

コンスタンチン・トロチェフ<sup>(ママ)</sup>(K・トロチェフ、C・トロチェフ、ロシヤノフスキー、ロシヤノフスキ)は、ロシア革命で日本に亡命してきたロシア貴族の両親のもと、1928年に兵庫県神戸市で生まれる。戦時中、軽井沢にて発症。1945年栗生楽泉園に入所<sup>(64)</sup>。2006年没。

生前、『ぼくのロシア』(昭森社、1967年)と『うたのあしあと』(土曜美術社出版販売、1998年)の2冊の詩集を出している。

『ぼくのロシア』刊行を支援したのは大江満雄であり、解説も大江が書いている。『うたのあしあと』は村松の没後に『高原』四代目の詩の選者を務めた森田進が編集を手掛け、編集後記も書いている。

一見すると村松が果たした役割が薄そうだが、『高原』の選評を丁寧に読んでいくと、思いがけない記述に出くわす。

「〔1966年〕五月のはじめ、ある日、銀座のオリンピックというレストランから電話がありました。昭森社の森谷均<sup>もりやひとし</sup>さんから「トロチェフが来た。きみに会いたいと言っている」と告げられました。トロチェフさんに会ったのは、二度目です。詩集の出版の希望をせつに述べられ〔略〕ました。〔略〕

(60) 星政治「ふるさとの詩」(『高原』第40巻第1号、1984年1月)12-13頁への評。村松武司「不自然でない幻想」(同上)14頁。

(61) しらね虚舟「俺の墓標」(『高原』第40巻第8号、1984年8月)17-18頁への評。村松武司「栗生詩話会の詩人たち」(同上)21頁。

(62) しらね虚舟「古里ってなんだろう」(『高原』第42巻第2号、1986年2月)13-14頁への評。村松武司「イメージのたしかさ」(同上)16頁。

(63) しらね虚舟「よび戻せ俺の記憶」(『高原』第47巻第9号、1991年9月)18頁への評。村松武司「冥土の結婚など」21頁。

(64) 「著者紹介」(『ハンセン病文学全集7 詩二』皓星社、2004年)568-569頁。

みんなで力をあわせて、彼の詩集の完成に努力しようではありませんか」<sup>(65)</sup>。

このあと大江と村松がどのような役割を担って詩集刊行に漕ぎつけたのかは不明だが、1967年9月に詩集は刊行されている。その最初の段階からトロチェフは村松を頼っていたことがわかる。

また、トロチェフが最初に書いた詩は「カミノキセキ」という作品で<sup>(66)</sup>、大江の選によってその詩人の才を見いだされるが<sup>(67)</sup>、その後、もっとも長きにわたって詩を選評したのは、村松であった。村松の選評によって、トロチェフの詩は磨きがかけられ、才を開いていったのである<sup>(68)</sup>。

村松は、トロチェフの詩を通じて、ロシアと日本の関係、トロチェフにとって故郷とは何かを問いながら、新たな世界文学の出現を期待している。

### ①祖国ロシアの描き方

トロチェフは日本で生まれ、そのまま栗生楽泉園に入所したため、一度もロシアの土を踏んではない。それにもかかわらず、ルーツであるロシアをうたった作品が多い。

「作者はロシア人ですから、冬を歌う深さは、さすが、と思わせます」<sup>(69)</sup>。

「トロチェフさんは不思議なことに、われわれよりも東洋的な感情を示すことがある。〔略〕彼のユニークな表現のうしろ側に、東洋と、西洋をふたつながら感じさせるものがある」<sup>(70)</sup>。

直接ロシアをうたわなくとも、その背後にロシアがあることを、村松は読みとろうとする。

「ロシアの匂いがする。〔略〕それは、語から語へ移ってゆくときの、視点が移ってゆくときの、ひろさと時間に起因するのだろう」<sup>(71)</sup>。

このように、語から語へ移ってゆくときの「ひろさと時間」が、ほかの日本人にはないものだという指摘は、詩人の村松ならではものだろう。

「流血の七月十七日、ニコライ二世とその家族の処刑の日である。トロチェフには亡命者の血が流れており、この日本にいて同じ日の京の祭りを見ている。ロシアと日本の歴史を一瞬のうちに甦らせる詩」<sup>(72)</sup>。

このように、京都を訪れて祇園祭を見物しながら、その日が、最後のロシア皇帝が処刑されたのと同じ日付であることに着想した詩も、トロチェフにしか書けない祖国ロシアへの望郷詩であった。

### ②新たな世界文学への期待

トロチェフは、四言語を操る。ロシア語を母語とし、ロシア貴族の祖母からフランス語も習った。ギリシア正教を信仰するなかで、その修道学校で英語を習っている。日本語は近所のこどもたちとの遊びのなかで覚えた<sup>(73)</sup>。しかし、トロチェフは、日本語でしか詩を書かなかった。カタカナとひらがなに漢字を少し混ぜる独特の表記形式で詩を書いている。

それを指して村松は、「作者と言葉との距離の遠さ、もどかしさを痛感する。〔略〕ハンセン氏病者、重い病人にとって故郷とはなにか。ましてロシアノフスキさんにとって、ロシアと日本は、たんに国境をへだてた異なる国なのか、どうか」と、ハンセン病となって故郷と引き離された外国人が、日本

(65) 村松武司「選評（八月作品）」〔『高原』第21巻第8号、1966年8月〕16頁。

(66) トロチェフ「カミノキセキ」（『高原』第9巻第7号、1954年7月）22頁。

(67) 大江満雄「短評」（同上）29頁。

(68) トロチェフ自身も、詩作にあたり村松の存在が大きかったと証言している。木村哲也『来者の群像—大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち』（編集室水平線、2017年）81頁。

(69) K・トロチェフ「冬のうた」〔『高原』第22巻第6号、1967年6月〕14頁への評。村松武司「選評」（同上）16頁。

(70) C・トロチェフ「流転」（『高原』第27巻第9号、1971年9月）16頁への評。村松武司「選評」（同上）18頁。

(71) C・トロチェフ「ロジナ」（『高原』第28巻第7号、1972年7月）17頁への評。村松武司「選評」（同上）19頁。

(72) トロチェフ「七月十七日」（『高原』第30巻第3号1974年3月）10-11頁への評。村松武司「選評」（同上）15頁。

(73) 前掲、木村哲也『来者の群像—大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち』73頁。

語で詩を書くうえでの言語獲得の困難に思いを致している<sup>(74)</sup>。

また、「彼は英語とロシア語ができるそうであるが、日本語の詩を書くときは、何度か口ずさみながらローマ字で書いてみるという。この試みは日本語をだいにし、日本語にやさしく触れていく実験であるのだろう」と、全篇ローマ字書きの詩の表現にも注目し、その試みに理解を示している<sup>(75)</sup>。

母語であるロシア語ではなく、第四言語である日本語で詩が生み出される現場に、村松はこのように深い関心を示すのであった。

「<sup>うねびやま</sup>敵傍山をあおい目でみる」は奇抜にきこえるかもしれないが、このイメージは壮大だ。当時にも、大陸からの帰化人が多くいたはずだし、日本から大陸へ渡って、故国の山容をなつかしんだ歌人もいる。なみのものではない日本への理解を、わたしはトロチェフさんのなかに発見する<sup>(76)</sup>。

『万葉集』は現存する日本最古の歌集であるが、そのなかの代表的な万葉歌人が、朝鮮半島からの渡来人であったとする説もある<sup>(77)</sup>。日本文学の古典が、さまざまなインターナショナルな書き手たちによってつくられていた可能性があるのだ。敵傍山を「あおい目」で見て詩を綴るロシア人が、古代の渡来系の万葉歌人に連なるものという壮大なイメージを、村松はこの作品から受け取っているのだ。

こうした詩人が描く世界は、「この作者には、繊細な抒情と、世界市民的な陽気さがある」<sup>(78)</sup>と評される。

ハンセン病療養所で生み出された一見ローカルな文学作品が、じつは日本語を使用言語とする香山末子やトロチェフといったさまざまな外国人によって書かれており、それは日本文学として閉じられるのではなく、やがて新たな世界文学となるという可能性を、村松の選評は示唆するのである<sup>(79)</sup>。

村松が挙げる「望郷」というキーワードをめぐる思索は、香山末子やしらね虚舟、トロチェフといった書き手を得て、選評の場を舞台にここまで豊かに展開されたのである。

### 3) ボディ・イメージ

村松が、評論「遙かなる故郷」のなかで、自殺、望郷に次いで指摘したのが、ボディ・イメージである。ハンセン病の症状、後遺症である運動神経麻痺、知覚神経麻痺からくる手指や足の欠損。そしてやはりハンセン病の症状、後遺症としてあらわれる失明。それぞれ、多くの詩人たちが詩の題材にうたっている。

評論「遙かなる故郷」が発表された1978年11月の時点で、村松が言及した作品は、<sup>さわだごろう</sup>沢田五郎の小説、<sup>のざき</sup>野崎きよの随筆、<sup>やましたはつこ</sup>沢田五郎、山下初子、古川時夫の短歌である。C・トロチェフについては（詩を紹介するのではなく）直接会話した時の言葉を取り上げている。すなわち、この時点で村松がボディ・イメージを論じるにあたって、詩作品への言及は皆無である。

村松の選評で取り上げられるボディ・イメージをうたった作品は、「遙かなる故郷」発表以降のものが多い。村松が詩の選をつづける過程で、ボディ・イメージについて思索を深めていったことがわかる。

村松がそれらの作品評を通じて、実際にどのような議論を展開しているのかを、本節では検討したい。

(74) ロシヤノフスキ「スケッチ」(『高原』第20巻第11号、1965年11月) 32頁への評。村松武司「選評」(同上) 32頁。

(75) ロシヤノフスキ「Aki ga Kita」(『高原』第21巻第1号、1961年1月) 12頁への評。村松武司「選評」(同上) 13頁。

(76) C・トロチェフ「敵傍山」(『高原』第29巻第2号、1973年2月) 12頁への評。村松武司「選評」(同上) 15頁。

(77) 中西進『山上憶良』(河出書房新社、1973年) 23-45頁。また、リービ英雄「越境の時代」(『日本語を書く部屋』岩波書店、2001年) 198頁も参照。

(78) C・トロチェフ「サンデー・セレナーデ」(『高原』第28巻第9号、1972年9月) 7頁への評。村松武司「選評」(同上) 9頁。

(79) トロチェフの詩については、鶴見俊輔も「これは、ひとりの世界人の詩集であり、ここにあるのは、未来の日本語だ」と指摘している。鶴見俊輔「この時代の井戸の底に」(トロチェフ『うたのあしあと』土曜美術出版販売、1998年) 82頁。

## (1) 欠損した手指や足

ハンセン病は治癒しても、知覚神経麻痺の後遺症により、けがをしても気づきにくくなり、細菌感染を起こしやすくなる。それが骨の炎症まで進むと骨の除去が必要となり、指は関節ごとに短くなってゆく。この骨を除去する手術を香山末子は「骨とり」といい、それを題材に選んだのが「八月三十一日」という詩だ<sup>(80)</sup>。

タイトルの「八月三十一日」は、右手の親指の「骨取り」の日付である。「ちょっと勿体ないけどしょうがないな」と医師の言葉があって手術が始まる。

「ボリボリ、カチンカチンと骨取ってる／途中でぐっと引っ張り上げて」と、様子が描写される。

このように、愛着のある手指を喪失することもあれば、場合によっては足の切断に至るケースも多い。『高原』にもそうした経験をもとにした詩が多数書かれている。

「指が一本もついていないのに十円玉をまさぐっていたという超現実風な記述。／見えないはずの手を、みんなが見ていたという想定は、作者の五体からはなれた内部的な手の存在を示す」<sup>(81)</sup>。

「患者の一人が訴える「義足の神経痛」が、ライ療園では普通のことかもしれないが、一般の人々には強い刺激を与えずにはおかない。いわゆる幻影肢のことである」<sup>(82)</sup>。

「指のない手が痛み、補装具のついた足が不平をいう」<sup>(83)</sup>。

臨床医学の分野で、「幻肢痛」と呼ばれる現象である。村松はこれらについて、「わたしたち晴眼者が文学表現で喪失している実在への探索は、ライ文学において発見できる」<sup>(84)</sup>と述べ、ハンセン病者の個々の経験にとどまらない新たな文学表現の可能性を提示している<sup>(85)</sup>。

## (2) 失明者の詩

『高原』の詩の欄の常連には、武内慎之助、古川時夫、香山末子、桜井哲夫といった失明者の詩人が多くいた。それにしたいが、村松は、失明者の詩人に対して関心を寄せている。失明者の詩への選評すべてを通読してみると、村松の関心の対象は、「見えないものを見ようとする努力」と、「他者との関係」とに大別できる。

### ①見えないものを見ようとする努力

「見えないものを見ようとする努力」について触れたものとして、以下の評が挙げられる。

「〔義眼が〕コロコロところがる。その空は青い。〔略〕自分はそれを見ることはできないが、義眼は、あきらかにそれをみている―」<sup>(86)</sup>。失明者には見ることができない美しい青空を、地面に転がった義眼だけが見ている情景を詩に描くのである。村松がこの詩を取り上げたことで、作者はこれ以降、くり返し義眼を主題にした詩を発表している。

皆既月食の詩がある。皆既月食は何年に一度という現象なので、おそらく療養所でも話題となり、同じ時刻に皆が月を見あげたであろう。この詩の作者は失明者なので、看護助手が雲の動きと皆既月食の空のようすを克明に告げてくれる。そこで「私は盲目の眼を開いてみる」<sup>(87)</sup>。このような詩だ。

(80) 香山すえ子「八月三十一日」(『高原』第39巻第7号、1983年7月) 18頁。

(81) 古川時夫「消えた指」(『高原』第32巻第7号、1976年8月) 12頁への評。村松武司「「見られている詩」二篇の意味」(同上) 16頁。

(82) 加藤三郎「待合室ホールにて」(『高原』第48巻第3号、1992年3月) 14頁への評。村松武司「静かな口調」(同上) 16頁。

(83) 桜井哲夫「冬の手紙」(『高原』第48巻第6号、1992年6月) 16頁への評。村松武司「与えられた人生、またはやってくる生命」(同上) 17頁。

(84) 前掲、村松武司「遙かなる故郷」127頁。

(85) 幻肢痛については、義足ユーザーでありキュレーターでもある青木彬によって、アートとの共通項を探る議論も提起されている。青木彬『幻肢痛日記』(河出書房新社、2024年)。

(86) 古川時夫「義眼」(『高原』第23巻第10号、1968年10月) 17頁への評。村松武司「選評」19頁。

(87) 武内慎之助「黠い月」(『高原』第25巻第7号、1969年7月) 12頁。

村松は「盲目のライ詩人が皆既月食をみる、という設定は、ひとりの批評的世界であり、痛烈な風刺である」<sup>(88)</sup>と評している。

ハンセン病になると、手足の知覚神経の麻痺が進行し、手指で物を触るときの感覚を失う。その代わりに、知覚が残っている舌先で触ってもののかたちを確かめる。花を鑑賞するのも、舌で触って行く。そのような詩を取り上げて村松は次のように述べる。「花にくちづける。そのとき花は彼女を迎えいれるように彼女に向いている。それは、晴眼のわたしたちが、花を觀賞するように眺めるのとあきらかに異なる。花を、人間のように愛する、人間と語るように会話するのかもしれない」<sup>(89)</sup>。

失明者特有の能力に触れた詩もある。味覚が研ぎ澄まされた結果、日々味わっている蜂蜜についていろいろなことに気づくという詩だ。「二年前から蜂蜜ががなくなったこと、むかしの蜂はいなくなったこと、またむかしの花でなくなったことも含められていて、香山さんの不思議な感覚能力におどろかされる」<sup>(90)</sup>。

さらに「なぜ盲人の詩が、多くの場合、印象的な色彩をもつのであろうか」<sup>(91)</sup>と、中途失明者が固有の色彩感覚をもっていることへの指摘もなされる。

燕が巣作りをしていることを知り、そちらを向き耳を澄ます、やがて雛が三羽であることを鳴き声だけで聞き分ける。「作者は盲人なのにどうしてこんな詩が書けるのか」<sup>(92)</sup>。

「ライ文学に「身体イメージ」という表現上の特徴があることについて、何度か触れてみた。その作者が弱くなる視力のなかで、対象を、眼だけでなく、体ごとで把えてゆこうとする多くの作品にも、そのことがいえる。〔略〕彼がこの詩のなかで確認しようとしている物体は、わたしがかつて見たことの無いものようだ」<sup>(93)</sup>。

このように、かつて自身が「ボディ・イメージ」というキーワードを設定した延長に、失明者独自の表現の領域が深々と広がっていることを発見し、失明者の詩にあらわれる主題の設定や表現方法の意味を、村松は選評を通して探求していくのである。

## ②他者との関係

次に、失明者が、他者との関係を独自の仕方でも表現したものを見ていきたい。

失明者は、詩を書くときには必ず代筆者が必要である。代筆者との関係を繰り返したハンセン病の文学論はまだ出ていないのではないか<sup>(94)</sup>。村松は次のようにその主題を掘り取っている。

「集められた詩のうちには、誰かに口述して書いてもらった原稿がまじっていました。口のなまりが他の人によって文法上の誤りとなって写されていたあとがありました。このような詩を口述したひとと写しとった人それらを思いうかべるとき、詩とは別のもの、人間と人間との通信に誇りを感じないわけにはゆきません」<sup>(95)</sup>。

「いままで、詩を速記してくれる人について書いた詩は、なかったように思う。〔略〕だいたいな人だ

(88) 村松武司「選評」(同上) 13頁。

(89) 香山末子「花」(『高原』第35巻第2号、1979年2月) 17頁への評。村松武司「たぐみな隠喩」(同上) 19頁。

(90) 香山末子「いやな蜂」(『高原』第38巻第9号、1982年9月) 19頁への評。村松武司「詩評」(同上) 20頁。

(91) 古川時夫「二枚の落葉」(『高原』第41巻第5号、1985年5月) 10-11頁への評。村松武司「自分の「飢餓感」を描く」(同上) 13頁。

(92) 桜井哲夫「半夏生の朝」(『高原』第47巻第11号、1991年11月) 16頁への評。村松武司「見えない何か」(同上) 20頁。

(93) 越一人「竹を踏む」(『高原』第36巻第11号、1980年12月) 16-17頁への評。村松武司「盲人の風景描写」(同上) 19頁。

(94) 口述筆記については、田村美由紀『口述筆記する文学—書くことの代性とジェンダー』(名古屋大学出版会、2023年)のように文学研究でも近年注目を集めている研究主題である。大江満雄がハンセン病療養所入所者の合同詩集を編集したさい、失明者口述筆記の問題に気づき「盲目になった人の口述を、だれかが写すというところには表現問題で興味ある問題があると思います」と指摘しているのは先駆的である。大江満雄「解説」(『いのちの芽』三一書房、1953年) 219頁。その後も『高原』(第10巻第2号、1955年2月)の文芸特集号で、小島幸二「舌読」、藤本とし「晩涼」、中村七鶯「点字」、信原翠陽「ひかり」といった失明者の詩を意識的に取り上げて、失明者の表現の問題を論じているのが目立つ。大江満雄「選後の感想」(同上) 43-44頁。

(95) 村松武司「選評」(『高原』第22巻第2号、1967年2月) 29頁。



から、白い指、やさしい指と呼びかける。作者自身がいとおしむように呼びかける」<sup>(96)</sup>。

先に、皆既月食の経過を説明する看護助手と、その言葉にしたがって目を見開く失明者との関係性を描写した詩についての評を紹介したが、次は、満天の星空を見ながら、流れ星があちこちに飛ぶのを説明してくれる看護助手との関係を描写した詩についての評である。「盲人の眠る部屋に看護人がやってきて夜空を開いてみせる。盲人に夜空は見えないが、なんとという美しい交流だろうか」<sup>(97)</sup>。

次は、入所者と故郷の家族との関係をうかがわせる詩の評である。

「盲人の作者に手紙は読めない。そして故郷の韓国は遠く、手紙もめったにこない。しかし作者は便りを待ちわびてくらす。〔略〕抒情などという言葉をつきぬけた、愛の詩だ」<sup>(98)</sup>。単に、故郷の手紙を待ちわびている、というのではない。失明者で手紙が読めないにもかかわらず、というところが要点である。

さらに、失明者どうしの関係性に焦点をあてた詩についての評もある。

「盲目の香山末子さんが書いた詩集を、同じように盲目の桜井さんが受取った。〔略〕桜井さんの読後感が、もっとも正確にそれを読むことができたと言えるだろう。「文字のない詩集」という、究極的なことばの意味を、作者が掴んでいるようにも思われる」<sup>(99)</sup>。

書き手の香山末子は失明者だから、口述で書き留められるとはいえ、もとはといえば文字のない詩である。それが集まって文字のない詩集ができる。それを受けとめる桜井哲夫も失明者だから、音読する者がいて、やはり「文字のない詩集」を聞いているのである。失明者どうしが詩集をやりとりするその関係性を、村松は興味深く論じている。

しかし、「文字がない詩集」と呼ばれるゆえんは、たんに二人が失明者だからというにとどまらない。最終行に至って桜井は、「文字のない詩集」を聞いているのは、「末子から文字を奪った国のこの俺」だというのだ。植民地出身の香山末子が、日本のハンセン病隔離政策によって祖国と切り離されて母語を奪われ、奪った国に生まれた桜井哲夫がその詩を聞いている。なぜ「文字のない詩集」であるのか、桜井はその背景を言い当てている。その関係性を、村松もまた、幾重にも読み込んで論じているのである。

さらに次のような詩の評もある。

「金さんは朝鮮人で、盲目で、日本語も不自由で、文字を書くことができない。だから自分を喜ばすために鳩笛を吹く。その音を、同盲目の作者が聞き、金さんの故郷の風景を描く。盲人ふたりが同じ風景をみているかもしれぬ、そのような感動」<sup>(100)</sup>。

失明者どうし相手が見えない中で、会話が交わされることがなくとも、鳩笛の音を黙って聞いている仲間との関係性が浮かび上がってくる。そしてその背景には、やはり植民地支配の影響を見ないわけにはいかない。異国に隔離され言葉が通じる話し相手がない入所者と、それを知りながら黙って鳩笛の音を聞いている詩人という隠れた背景である。この場合も、村松という評者がいて、その詩の意味が私たちに伝えられるのである。

以上、ボディ・イメージに加え失明者の詩の世界に、村松がどのように関心をもったかを選評からたどってみた。

いずれも、ボディ・イメージをキーワードに挙げた1978年の評論「遙かなる故郷」で、「わたした

(96) 桜井哲夫「白い指」(『高原』第40巻第11号、1984年11月) 17頁への評。村松武司「春のおとずれの作品など」(同上) 20頁。

(97) 古川時夫「流れ星」(『高原』第39巻第7号、1983年7月) 13頁への評。村松武司「美しい詩」(同上) 16頁。

(98) 香山すえ子「風で送ってくる落葉」(『高原』第43巻第7号、1987年7月) 12頁への評。村松武司「素材の凄さと作者」(同上) 15頁。

(99) 桜井哲夫「文字のない詩集」(『高原』第40巻第6号、1984年6月) 8-9頁への評。村松武司「高い調子、静かな情熱」(同上) 13頁。

(100) 桜井哲夫「鳩笛」(『高原』第44巻第10号、1988年10月) 12-13頁への評。村松武司「日常のなかでの発見」(同上) 15頁。

ち晴眼者が文学表現で喪失している実在への探索は、ライ文学において発見できるようだ」<sup>(101)</sup>と論じて以降に書かれた選評ばかりであるが、その後の村松の目の行き届かせ方、思索の深まりもさることながら、書き手たちの表現の成熟もまた、村松の評を通じてうかがい知ることができるのである。

#### 4) 全体性の回復

最後に取り上げるのは、「全体性の回復」というテーマである。

先に述べたように、村松が四つのキーワードを論じた評論「遙かなる故郷」にやがて結実する構想が、その数か月前に栗生楽泉園で開催された教養講座の席で、講師の村松から語られている。その教養講座の席で挙げられているのは、自殺、望郷、ボディ・イメージの三つであった<sup>(102)</sup>。すなわち、「全体性の回復」という主題は、あとから付け足され、四つ目のキーワードとなったことがわかるのである。本章の最後に、このテーマについて、選評でどのように論じられているかを見ていきたい。

「全体性の回復」というのは、四番目にあとから付け足されたキーワードであるが、村松が1978年に「遙かなる故郷」を書く13年も前の『高原』1965年8月号に、笹雄二の「祖国へ」という詩の選評でいち早く取り上げていた主題であった。

笹はこの詩で、「二十年 五十年の ふかい断絶を／ライの氷壁を ついに克服しえたとしても／即ちそれが ボク達のふるさと／祖国日本の 美しい回復を意味するか?!」<sup>(103)</sup>と読み手に問いかけている。

村松はこの問いかけを受けて、「氷壁が克服される時〔略〕この克服には幾通りかの道があるはずで、ひとつは解放。またひとつは、この異国が自らの力で滅びてゆく道。作者が、祖国が果して美しい回復を得るかどうかを問うているのは、この克服の選び方を問うているのだと思います」<sup>(104)</sup>と応じた。ハンセン病患者・回復者やその家族に対する人権侵害を、「自らの力で滅びてゆく」というかたちではなく、「解放」というかたちで克服できるのか、と村松はその問いを受け止めているのである。

これは後に村松が「全体性の回復」と表現した視点の萌芽である。以後、村松の選評では、笹の問いへの答えを探しつつけるように、折にふれて「全体性の回復」という主題に言及していく。

トロチェフは、長崎へと旅をし、長崎の被爆地の復興と、自身のハンセン病による容貌の変化とを重ねて、「ほくも／きみも／かわつたなあ」とうたう<sup>(105)</sup>。これに対し村松は、「ほくにライからの復興はあるのか？ そういう痛烈な質問を投げかけている詩といえるだろう」<sup>(106)</sup>と評している。

被爆地長崎は、めざましい復興を遂げた。作者の容貌はハンセン病の後遺症によって変わってしまったが、そこからの「復興」はあるのか？ 村松の問題の立て方からすれば、それは単なる医学的な回復をいうのではなく、そうした後遺症をもつ人びとを前に、私たちの側が関係を結び直せるのか、ということまでを含めた「回復」を想定しているのである。

小林弘明「友だち」は、次のような詩である。少年時代の友人が、何十年ぶりに会いに来てくれる。自分が暮らす療養所を訪ねてきた者はそれまで母と兄夫婦以外誰もいなかった。「君は変わったね！」などと屈託なく友人が言う。友人の妻も「遠慮なく私たちの故郷に来て下さい」と言ってくれる。

村松は、ここに、両者の回復過程が描かれていることを見いだして、「ライの回復を、全体的な回復によってうちたてようとする」と評している<sup>(107)</sup>。

(101) 前掲、村松武司「遙かなる故郷」127頁。

(102) 村松武司「詩はなぜ書くか」(『高原』第34巻第9号、1978年9月) 25頁。

(103) 笹雄二「祖国へ」(『高原』第20巻第8号、1965年8月) 21頁。

(104) 村松武司「選評」(同上) 23頁。

(105) K・トロチェフ「ナガサキシばらく」(『高原』第21巻第5号、1966年5月) 17頁。

(106) 村松武司「選評」(同上) 19頁。

(107) 小林弘明「友だち」(『高原』第41巻第4号、1985年4月) 12-13頁への評。村松武司「詩という錨を自分におろす」(同上) 14頁。

ハンセン病患者が医学的に回復したところで、かれらを迫害し療養所に追いやった私たちの側がハンセン病問題を克服しない限り、本当の回復はない。そのことを、村松は『高原』での詩の選評を通じて「全体性の回復」という主題として採り当てたのであった。

## おわりに—ハンセン病の詩の固有性と普遍性

最後に、四つのキーワードからこぼれ落ちる問題についてふれておきたい。村松がしばしば言及している「ハンセン病の詩の固有性と普遍性」をめぐる問題である。ハンセン病の詩の固有性と文学としての普遍性との関係について、村松はどのように考えていたのであろうか。

村松は、ある選評で、「これらの作品が草津の療養所だけで通用する詩であつてほしくないという感じがします」<sup>(108)</sup>と述べている。

これだけを言葉どおり読めば、ハンセン病の固有性にこだわるのではなく、普遍的な文学を目指してほしいと述べているようにも受け取れる。ただし、一方で、村松は次のようにも述べていることに注意したい。

「一般の詩に近づく、言いかえれば、うまい、いい詩を書こう、という努力は捨てたほうがむしろよいと思います。〔略〕作者の持つ環境と条件、主体にしたがって、肉屋なら肉屋、新聞売りなら新聞売りを、貫く詩を書いていただきたいと願うからに外なりません」<sup>(109)</sup>。

ここではむしろ、「作者の持つ環境と条件、主体にしたがって」、つまりハンセン病固有の経験を大切にして、それを貫くような詩を書いてほしいという希望を述べている。

また、選評ではないが、教養講座では次のような発言をしている。

「ローカルの問題をとことんやって見て、それが本当に大きな世界に通じるようになるか、ならぬかが勝負だ、最初からローカルなことに目をつぶって、例えば、一つの鍵をつくり、マスターキーというやつです。これは、一本の鍵でどんなところでも、どんな部屋でも開くやつです。どんな部屋にも通じるような文学は、私は存在しないと思います。一つのことにとことんこだわって、そのことにおぼれて、とことんこだわった為、その結果として、外の世界の人たちが、共通のものを感じてくれるものが、本当に世界的なものであり、初めから通ずるようなものを書いたとしたら、甘ったるいものであると考えます」<sup>(110)</sup>。

村松の言いたいことは、この発言に尽きている。ハンセン病固有の経験にこだわることで、普遍的な文学に到達する道が目指されている。

このことを具体的な詩のことばでいうと、次のようになるだろうか。以下に引用するのは、合川実の詩「豚の命」<sup>(111)</sup>の評である。

「豚は殺され、人間の血肉と化す。そうなる人間は豚のことは忘れてしまう。殺された豚は、しかし、まだ何か、そのあとのことを考えているのである。〔略〕日本はライ患者をなくすことができるだろう。そのときの人々はライについて忘れてしまうはずだ。しかしほんとうは忘れてはならない。ライはなくなるが、ライによつて死んだ人々の心が、そのときの人々の心のなかからなくなるはずがないのだ。〔略〕とすると、合川さんのように考えている人々は多くいるような気がする。日本は植民地を失った。もはや圧政によつて苦しめられる他の人種、民族はいない。わたしたち日本人は、戦後、植民主義者の名で呼ばれなくてすんだ。だがはたしてそうか。いまだに日本の内部に植民地が残されているのではないか。沖縄、ライ、部落、在日朝鮮人問題。合川さんの詩は、このような問題に触

(108) 村松武司「選後評」(『高原』第20巻第4号、1965年4月) 21頁。

(109) 村松武司「選評」(『高原』第21巻第12号、1966年12月) 23頁。

(110) 村松武司「教養講座・詩はなぜ書くか」(『高原』第34巻第9号、1978年9月) 27頁。

(111) 合川実「豚の命」(『高原』第22巻第1号、1967年1月) 17頁。合川実は1958年9月から1972年8月にかけて『高原』に詩を発表しているが、生年、没年ともに不明。

れずにはおかないのである」<sup>(112)</sup>

ハンセン病の固有な経験を詩にする姿勢を貫くことで、別の経験を持つ多くの人にも問題が伝わる  
とはどういうことなのかを、具体的な詩の言葉に沿って、見事に言い当てた評である。

村松自身も、ハンセン病療養所の詩人たちと出会うなかでハンセン病固有の問題を知り、それまで  
抱え持っていた植民地朝鮮の入植者である自らの加害の自覚を、別個の問題ではなく、共通するひと  
つの問題だと考えるに至っている<sup>(113)</sup>。

自らの加害の問題を見まいとする日本の風土の中で村松は、このようにして被害当事者が亡くなっ  
ても、かれらが残した言葉が、私たちに問題を投げかけつづけるものだと考え、ハンセン病問題を受  
けとめる私たちの応答の責任を論じつづけたのである。

以上、四つのキーワードを中心に村松の選評を検討した結果、私たちが受け取るべきことは、以下  
の3点にまとめられる。

①詩にあらわれた新たな主題や表現方法を、丁寧に掬い上げることで、ハンセン病文学に新たな意  
義を付け加え、その魅力をいまでも私たちに教えてくれること。

②ハンセン病問題の解決を「全体的回復」と新たに定義づけることで、病者が病気から回復するだ  
けでなく、私たちの側が偏見・差別にとらわれている状態から回復する必要があるのだと再定義した  
こと。

③ハンセン病の文学は、その書き手の経験の固有性を貫くことで、文学としての普遍性を併せ持つ  
こと。しかし安易な共感や一体感を村松は拒絶し、彼我の隔たりを自覚したうえで相互理解に至る道  
筋を考えつづけたこと。

× × ×

「今月の詩が少ない。しかしこの四名の方々の詩、詩というよりはそれを書こうとした精神の深淵  
を見る思いがあった。正確に云えば、わたしには自分にもそのような詩心がほしい」<sup>(114)</sup>。

これは、1992年12月に、村松が手がけた最後の選評の一節である。村松はこの翌年8月28日に69歳  
で永眠する。自分にないものを、ハンセン病患者・回復者の詩人たちが持っていることを認め、かれ  
らに学びたいという姿勢を評者として最後まで崩さなかったことがわかる。

村松武司という詩人については、これまでハンセン病問題の研究者によって論じられることはほと  
んどなかったが、詩の選評の検討を通して、私たちが受け取ることができる示唆は大きい。

(112) 村松武司「選評」(同上) 19頁。

(113) 村松は、評論集『遙かなる故郷—ライと朝鮮の文学』(皓星社、1979年)のあとがきで、「わたしの戦後三〇年の主題で、ライと朝鮮という、二つの中心をもった楕円形が、じつはわたしにとってほぼ円に近づいている。つまり二つの中心は、ひとつと思っ  
ている」148頁と述べている。

(114) 村松武司「四篇共有の深さ」(『高原』第48巻第12号、1992年12月) 21頁。

表 「村松武司『高原』作品リスト」

No	書名	号数	刊行年月	著者名	表題	備考
1	高原	第13巻第10号	1958年10月	村松武司	武内慎之助詩集「裸樹」に寄せられた便り	
2	高原	第15巻第4号	1960年4月	村松武司	ある朝	自作詩。
3	愛生	第15巻第2号	1961年2月	村松武司	「志樹逸馬詩集」によせて	
4	高原	第20巻第1号	1965年1月	村松武司	追体験のための自己紹介	
5	高原	第20巻第3号	1965年3月	村松武司	選評	
6	高原	第20巻第4号	1965年4月	村松武司	選後評	
7	高原	第20巻第5号	1965年5月	村松武司	〈詩〉	選のみ、評なし。
8	高原	第20巻第6号	1965年6月	村松武司	選評	
9	高原	第20巻第8号	1965年8月	村松武司	選評	
10	高原	第20巻第9号	1965年9月	村松武司	選評	
11	高原	第20巻第10号	1965年10月	村松武司	選評	
12	高原	第20巻第11号	1965年11月	村松武司	選評	
13	高原	第20巻第12号	1965年12月	村松武司	選評	
14	高原	第21巻第1号	1966年1月	村松武司	選評	
15	高原	第21巻第2号	1966年2月	村松武司	選評	
16	高原	第21巻第3号	1966年3月	村松武司	選評	
17	高原	第21巻第4号	1966年4月	村松武司	選評	
18	高原	第21巻第5号	1966年5月	村松武司	選評	
19	高原	第21巻第6号	1966年6月	村松武司	選評	
20	高原	第21巻第8号	1966年8月	村松武司	選評（七月作品）	
21	高原	第21巻第8号	1966年8月	村松武司	選評（八月作品）	
22	高原	第21巻第9号	1966年9月	村松武司	選評	
23	高原	第21巻第10号	1966年10月	村松武司	選評	
24	高原	第21巻第11号	1966年11月	村松武司	選評	
25	高原	第21巻第12号	1966年12月	村松武司	選評	
26	高原	第22巻第1号	1967年1月	村松武司	選評	
27	高原	第22巻第2号	1967年2月	村松武司	選評	
28	高原	第22巻第4号	1967年4月	村松武司	選評	
29	高原	第22巻第5号	1967年5月	村松武司	選評	
30	高原	第22巻第6号	1967年6月	村松武司	選評	
31	高原	第22巻第7号	1967年7月	村松武司	選評	
32	高原	第22巻第8号	1967年8月	村松武司	選評	
33	高原	第22巻第9号	1967年9月	村松武司	選評	
34	高原	第22巻第10号	1967年10月	村松武司	選評	
35	高原	第22巻第11号	1967年11月	村松武司	選評	
36	高原	第23巻第1号	1968年1月	村松武司	選評	
37	高原	第23巻第2号	1968年2月	村松武司	選評	
38	高原	第23巻第3号	1968年3月	村松武司	選評	
39	高原	第23巻第5号	1968年5月	村松武司	選評	
40	高原	第23巻第6号	1968年6月	村松武司	選評	
41	高原	第23巻第7号	1968年7月	村松武司	選評	
42	高原	第23巻第9号	1968年9月	村松武司	選評	
43	高原	第23巻第10号	1968年10月	村松武司	選評	
44	高原	第25巻第1号	1969年1月	村松武司	選評	
45	高原	第25巻第2号	1969年2月	村松武司	選評	

46	高原	第25巻第6号	1969年6月	村松武司	選評	
47	高原	第25巻第7号	1969年7月	村松武司	選評	
48	高原	第25巻第10号	1969年10月	村松武司	教養講座・詩の出発(1)	
49	高原	第25巻第11号	1969年11月	村松武司	教養講座・詩の出発(2)	
50	高原	第26巻第3号	1970年3月	村松武司	選評	
51	高原	第26巻第4号	1970年4月	村松武司	選評	
52	高原	第26巻第5号	1970年5月	村松武司	選評	
53	高原	第26巻第8号	1970年8月	村松武司	選評	
54	高原	第26巻第9号	1970年9月	村松武司	選評	
55	高原	第26巻第10号	1970年10月	村松武司	選評	
56	高原	第26巻第11号	1970年11月	村松武司	選評	
57	高原	第26巻第12号	1970年12月	村松武司	選評	
58	高原	第27巻第3号	1971年3月	村松武司	ライの中の朝鮮(1)	日本朝鮮研究所『朝鮮研究』第90・91・92・94号から転載。
59	高原	第27巻第4号	1971年4月	村松武司	ライの中の朝鮮(2)	同上。
60	高原	第27巻第5号	1971年5月	村松武司	ライのなかの朝鮮(3)	同上。
61	高原	第27巻第9号	1971年9月	村松武司	選評	
62	高原	第28巻第7号	1972年7月	村松武司	選評	
63	高原	第28巻第8号	1972年8月	村松武司	選評	
64	高原	第28巻第9号	1972年9月	村松武司	選評	
65	高原	第28巻第11号	1972年11月	村松武司	選を終えて	
66	高原	第29巻第2号	1973年2月	村松武司	選評	
67	高原	第29巻第3号	1973年3月	村松武司	選評	
68	高原	第29巻第4号	1973年4月	村松武司	選評	
69	高原	第29巻第9号	1973年9月	村松武司	選評	
70	高原	第29巻第10号	1973年10月	村松武司	選評	
71	高原	第29巻第11号	1973年11月	村松武司	選評	園内特別文芸募集作品。
72	高原	第29巻第11号	1973年11月	村松武司	選評	通常の詩の選評。
73	高原	第29巻第12号	1973年12月	村松武司	選評	
74	高原	第30巻第1号	1974年1月	村松武司	四つのあいさつ『残影』出版祝賀記念会に出席して	1973年10月18日、栗生楽泉園石黒会館にて。鄭敬謨、姜舜、李恢成と出席。
75	高原	第30巻第1号	1974年1月	村松武司	二つのものめぐりあい	同上。
76	高原	第30巻第1号	1974年1月	村松武司	選評	
77	高原	第30巻第2号	1974年2月	村松武司	選評	
78	高原	第30巻第3号	1974年3月	村松武司	選評	
79	高原	第30巻第4号	1974年4月	村松武司	選評	
80	高原	第30巻第5号	1974年5月	村松武司	選評	
81	高原	第30巻第7号	1974年8月	村松武司	詩をよんで	
82	高原	第30巻第8号	1974年9月	村松武司	詩をよんで	
83	高原	第30巻第10号	1974年11月	村松武司	選評	
84	高原	第30巻第11号	1974年12月	村松武司	選評	
85	高原	第31巻第1号	1975年1月	村松武司	選評	
86	高原	第31巻第2号	1975年2月	村松武司	感想	二月分。
87	高原	第31巻第2号	1975年2月	村松武司	詩をよんで	同じ号に二つ掲載。
88	高原	第31巻第3号	1975年4月	村松武司	描かれるものとの距離	

89	高原	第31巻第5号	1975年6月	村松武司	感想	
90	高原	第31巻第6号	1975年8月	村松武司	感想	
91	高原	第31巻第7号	1975年9月	村松武司	感想	
92	高原	第31巻第8号	1975年10月	村松武司	感想	
93	高原	第31巻第9号	1975年11月	村松武司	感想	通常の詩の選評。
94	高原	第31巻第9号	1975年11月	村松武司	選評	文芸特別募集作品。
95	高原	第31巻第10号	1975年12月	村松武司	感想	
96	高原	第32巻第2号	1976年3月	村松武司	選評	
97	高原	第32巻第3号	1976年4月	村松武司	選評	
98	高原	第32巻第4号	1976年5月	村松武司	選評	
99	高原	第32巻第5号	1976年6月	村松武司	比喩のしかた	
100	高原	第32巻第6号	1976年7月	村松武司	現実との緊張関係について	
101	高原	第32巻第7号	1976年8月	村松武司	「見られている詩」二篇の意味	
102	高原	第32巻第8号	1976年9月	村松武司	「追憶の詩」	
103	高原	第32巻第9号	1976年10月	村松武司	外の詩と内の詩	
104	高原	第32巻第10号	1976年11月	村松武司	事実と譬喩(たとえ)	
105	高原	第32巻第10号	1976年11月	村松武司	選評	特別文芸募集作品。
106	高原	第32巻第11号	1976年12月	村松武司	厳格と自由	
107	高原	第33巻第1号	1977年1月	村松武司	詩の老成と開拓精神	
108	高原	第33巻第2号	1977年2月	村松武司	印象的な一つのことば	
109	高原	第33巻第3号	1977年3月	村松武司	幻想の直実	
110	高原	第33巻第4号	1977年4月	村松武司	対象との同化	
111	高原	第33巻第5号	1977年5月	村松武司	生きている証拠の詩	
112	高原	第33巻第6号	1977年6月	村松武司	自然のなかの人間	
113	高原	第33巻第7号	1977年7月	村松武司	〈詩〉	選のみ、評なし。
114	高原	第33巻第8号	1977年8月	村松武司	「香り」で見る。	
115	高原	第33巻第9号	1977年9月	村松武司	メルヘンほうそかまことか	
116	高原	第33巻第10号	1977年10月	村松武司	貧しさのなかの人間性	
117	高原	第33巻第11号	1977年11月	村松武司	自分の言葉で書く	
118	高原	第33巻第11号	1977年11月	村松武司	選評	特別文芸募集作品。
119	高原	第33巻第12号	1977年12月	村松武司	敘述の中の叫び	
120	高原	第34巻第1号	1978年1月	村松武司	自分の言葉で	
121	高原	第34巻第2号	1978年2月	村松武司	イメージになりにくい重い内容	
122	高原	第34巻第4号	1978年4月	村松武司	精神の現象を書く人たち	
123	高原	第34巻第5号	1978年5月	村松武司	身世打鈴(しんせたりょん)(身の上ばなし)	
124	高原	第34巻第6号	1978年6月	村松武司	みえないものを追求する二篇	
125	高原	第34巻第6号	1978年6月	村松武司	過去と一生の詩	
126	高原	第34巻第7号	1978年7月	村松武司	恐ろしい抒情	
127	高原	第34巻第8号	1978年8月	村松武司	特異と全体	
128	高原	第34巻第9号	1978年9月	村松武司	生活と伝説	
129	高原	第34巻第9号	1978年9月	村松武司	教養講座「詩はなぜ書くか」	6月4日、栗生厚生会館。
130	高原	第34巻第10号	1978年10月	村松武司	手さぐりの詩論	
131	高原	第34巻第11号	1978年11月	村松武司	残光の描写力など	特別文芸募集作品。
132	高原	第34巻第12号	1978年12月	村松武司	ライ文学の方法	
133	高原	第35巻第1号	1979年1月	村松武司	不在感と内面世界	
134	高原	第35巻第2号	1979年2月	村松武司	たくみな陰喩	
135	高原	第35巻第3号	1979年3月	村松武司	夢を書こう	

136	高原	第35巻第5号	1979年5月	村松武司	故郷確認	
137	高原	第35巻第6号	1979年6月	村松武司	暗示の詩	
138	高原	第35巻第7号	1979年7月	村松武司	擬人の花	
139	高原	第35巻第8号	1979年8月	村松武司	正体のみえぬものを書く	
140	高原	第35巻第9号	1979年9月	村松武司	深さととどく一行	
141	高原	第35巻第10号	1979年10月	村松武司	手さぐりの世界	
142	高原	第35巻第11号	1979年11月	村松武司	選後評	特別文芸募集作品。
143	高原	第35巻第12号	1979年12月	村松武司	壁の色に慣れる	
144	高原	第36巻第2号	1980年3月	村松武司	変身願望	
145	高原	第36巻第3号	1980年4月	村松武司	厳しい抒情詩	
146	高原	第36巻第4号	1980年5月	村松武司	夢のなかの映像	
147	高原	第36巻第6号	1980年7月	村松武司	つらい心を問う	
148	高原	第36巻第7号	1980年8月	村松武司	納骨堂を前にした詩など	
149	高原	第36巻第8号	1980年9月	村松武司	開拓者たちの詩	
150	高原	第36巻第10号	1980年11月	村松武司	詩のなかの歴史性	特別文芸募集作品。
151	高原	第36巻第11号	1980年12月	村松武司	盲人の風景描写	
152	高原	第37巻第1号	1981年1月	村松武司	最後のライと「二度目」人生	
153	高原	第37巻第2号	1981年2月	村松武司	看護婦を歌う	
154	高原	第37巻第3号	1981年3月	村松武司	気分と感情を示した詩	
155	高原	第37巻第4号	1981年4月	村松武司	季節と人生	
156	高原	第37巻第5号	1981年5月	村松武司	記録性のつよい詩	
157	高原	第37巻第6号	1981年6月	村松武司	一つのことを言う	
158	高原	第37巻第7号	1981年7月	村松武司	実存的要素	
159	高原	第37巻第7号	1981年7月	村松武司	死と闇	
160	高原	第37巻第8号	1981年8月	村松武司	寂しさの詩	
161	高原	第37巻第9号	1981年9月	村松武司	詩にあらわれた人生	
162	高原	第37巻第10号	1981年10月	村松武司	つながり（相関）の世界	
163	高原	第37巻第11号	1981年11月	村松武司	評	特別文芸募集作品。
164	高原	第37巻第12号	1981年12月	村松武司	精神と詩	
165	高原	第38巻第1号	1982年1月	村松武司	凝人化以前のもの	
166	高原	第38巻第2号	1982年2月	村松武司	孤独の詩	
167	高原	第38巻第2号	1982年2月	村松武司	笹雄二、趙根在詩と写真『ライは長い旅だから』	書評。季刊『三千里』第28号、1981年11月1日より転載。
168	高原	第38巻第3号	1982年3月	村松武司	社会人・非社会人とは何か？	
169	高原	第38巻第4号	1982年4月	村松武司	葬いのあとの空白など	
170	高原	第38巻第5号	1982年5月	村松武司	自由な表現法	
171	高原	第38巻第6号	1982年6月	村松武司	詩という手段を使って	
172	高原	第38巻第7号	1982年7月	村松武司	評	
173	高原	第38巻第8号	1982年8月	村松武司	詩話会の最近の収穫	
174	高原	第38巻第9号	1982年9月	村松武司	詩評	
175	高原	第38巻第10号	1982年10月	村松武司	詩話幻聴	自作詩。
176	高原	第38巻第10号	1982年10月	村松武司	詩評	
177	高原	第38巻第11号	1982年11月	村松武司	寸評	特別文芸募集作品。
178	高原	第38巻第12号	1982年12月	村松武司	平凡をつきぬける素直さ	
179	高原	第39巻第1号	1983年1月	村松武司	夢のもつ現実性	
180	高原	第39巻第2号	1983年2月	村松武司	時評	
181	高原	第39巻第3号	1983年3月	村松武司	自然と人工	



182	高原	第39巻第3号	1983年3月	村松武司	詩評	
183	高原	第39巻第4号	1983年4月	村松武司	評	
184	高原	第39巻第5号	1983年5月	村松武司	評	
185	高原	第39巻第6号	1983年6月	村松武司	評	
186	高原	第39巻第7号	1983年7月	村松武司	美しい詩	
187	高原	第39巻第7号	1983年7月	村松武司	夢の詩の深さ	
188	高原	第39巻第8号	1983年8月	村松武司	音という情報	
189	高原	第39巻第9号	1983年9月	村松武司	超越的な存在にふれる	
190	高原	第39巻第10号	1983年10月	村松武司	独自の詩法	
191	高原	第39巻第11号	1983年11月	村松武司	あなたの存在性	
192	高原	第39巻第12号	1983年12月	村松武司	仮の世界のしたたかさ	
193	高原	第40巻第1号	1984年1月	村松武司	不自然でない幻想	
194	高原	第40巻第2号	1984年2月	村松武司	果実の生命	
195	高原	第40巻第3号	1984年3月	村松武司	選評	400号記念。
196	高原	第40巻第4号	1984年4月	村松武司	自分を乗せて走る夢	
197	高原	第40巻第5号	1984年5月	村松武司	見えない世界	
198	高原	第40巻第6号	1984年6月	村松武司	高い調子、静かな情熱	
199	高原	第40巻第6号	1984年6月	村松武司	短編小説のような	
200	高原	第40巻第6号	1984年6月	村松武司	「一篇の詩」を書くのに	
201	高原	第40巻第7号	1984年7月	村松武司	選後評	
202	高原	第40巻第8号	1984年8月	村松武司	栗生詩話会の詩人たち	
203	高原	第40巻第9号	1984年9月	村松武司	加藤さんの実験その他	
204	高原	第40巻第9号	1984年9月	村松武司	桜井哲夫の詩一近・現代詩の流れでなく	『コスモス』第4次第45号、1984年6月より転載。
205	高原	第40巻第10号	1984年10月	村松武司	技巧のうしろのもの	
206	高原	第40巻第11号	1984年11月	村松武司	春のおとずれの作品など	
207	高原	第40巻第12号	1984年12月	村松武司	反詩のおもしろさ他	
208	高原	第41巻第1号	1985年1月	村松武司	抒情の本質	
209	高原	第41巻第2号	1985年2月	村松武司	人間の深さとリアリズム	
210	高原	第41巻第3号	1985年3月	村松武司	ひまわりと絶句	
211	高原	第41巻第4号	1985年4月	村松武司	詩という錨を自分におろす	
212	高原	第41巻第5号	1985年5月	村松武司	自分の「飢餓」感を描く	
213	高原	第41巻第6号	1985年6月	村松武司	表現の深さ	
214	高原	第41巻第7号	1985年7月	村松武司	実感的な作品	
215	高原	第41巻第8号	1985年8月	村松武司	現実味と寓意	
216	高原	第41巻第9号	1985年9月	村松武司	ユーモアと人間らしい姿	
217	高原	第41巻第10号	1985年10月	村松武司	わたしたちは何のために書いているのか	
218	高原	第41巻第10号	1985年10月	村松武司	<教養講座>詩と風景	5月12日、厚生会館。
219	高原	第41巻第11号	1985年11月	村松武司	文芸特集号<詩の部>	選のみ、評なし。
220	高原	第41巻第12号	1985年12月	村松武司	表現しつづけよう死ぬまでは	
221	高原	第41巻第12号	1985年12月	村松武司	「旗」という詩	越一人詩集『違い鷹羽』出版特集。
222	高原	第42巻第1号	1986年1月	村松武司	頻度ゼロの言葉	
223	高原	第42巻第2号	1986年2月	村松武司	イメージのたしかさ	
224	高原	第42巻第3号	1986年3月	村松武司	劇的光景	
225	高原	第42巻第4号	1986年4月	村松武司	故郷の墓と自分	
226	高原	第42巻第5号	1986年5月	村松武司	気配を正確に書く	

227	高原	第42巻第6号	1986年6月	村松武司	生存する詩	
228	高原	第42巻第7号	1986年7月	村松武司	写生の深さ	
229	高原	第42巻第8号	1986年8月	村松武司	それぞれの雪	
230	高原	第42巻第8号	1986年8月	村松武司	明澄な外界認識	古川時夫詩集『ながれ』出版特集。
231	高原	第42巻第9号	1986年9月	村松武司	半世紀以前	
232	高原	第42巻第10号	1986年10月	村松武司	日常性と星・光る日	
233	高原	第42巻第11号	1986年11月	村松武司	イメージと枠組	
234	高原	第42巻第12号	1986年12月	村松武司	選評	
235	高原	第43巻第1号	1987年1月	村松武司	評	
236	高原	第43巻第2号	1987年2月	村松武司	みえないものの実在感など	
237	高原	第43巻第3号	1987年3月	村松武司	民謡の迫力	
238	高原	第43巻第4号	1987年4月	村松武司	「病醜」を超える時	
239	高原	第43巻第5号	1987年5月	村松武司	新しい素材	
240	高原	第43巻第6号	1987年6月	村松武司	老いながら生きる	
241	高原	第43巻第7号	1987年7月	村松武司	素材の凄さと作者	
242	高原	第43巻第7号	1987年7月	村松武司	過去へのこだわり、いまの平和	
243	高原	第43巻第8号	1987年8月	村松武司	美しい訛と歴史	
244	高原	第43巻第9号	1987年9月	村松武司	一日だけの学校	
245	高原	第43巻第9号	1987年9月	村松武司	対象の「パフォーマンス」	
246	高原	第43巻第10号	1987年10月	村松武司	夢と真実	
247	高原	第43巻第10号	1987年10月	村松武司	教養講座・即身文学論	1987年6月7日、栗生楽泉園。
248	高原	第43巻第11号	1987年11月	村松武司	アフリカの夏	
249	高原	第43巻第11号	1987年11月	村松武司	〈ライと朝鮮〉山上の人たち	文集『トラジの詩』出版特集。1987年8月1日、栗生楽泉園福祉会館。
250	高原	第43巻第12号	1987年12月	村松武司	死の詩	
251	高原	第44巻第1号	1988年1月	村松武司	記憶のなかにつながる	
252	高原	第44巻第2号	1988年2月	村松武司	自伝的な詩も	
253	高原	第44巻第3号	1988年3月	村松武司	死にちかくなって	
254	高原	第44巻第4号	1988年4月	村松武司	二つの門	
255	高原	第44巻第4号	1988年4月	村松武司	貴重な医学史、思想史研究—経世済民期のゆたかなイメージ	『図書新聞』1988年2月13日より転載。小林茂信著「中居屋重兵衛とらい」出版記念特集。
256	高原	第44巻第5号	1988年5月	村松武司	門の内と外	
257	高原	第44巻第6号	1988年6月	村松武司	修飾語でなく動きのことばに	
258	高原	第44巻第7号	1988年7月	村松武司	消失した指の存在感	
259	高原	第44巻第8号	1988年8月	村松武司	二つの主体について	
260	高原	第44巻第9号	1988年9月	村松武司	生の実感	
261	高原	第44巻第10号	1988年10月	村松武司	日常のなかでの発見	
262	高原	第44巻第11号	1988年11月	村松武司	実在の主張	
263	高原	第44巻第12号	1988年12月	村松武司	孤独な舞台	
264	高原	第45巻第1号	1989年1月	村松武司	過去に焦点をあてる詩	
265	高原	第45巻第2号	1989年2月	村松武司	迷った道の表現	
266	高原	第45巻第3号	1989年3月	村松武司	平凡と不思議	

267	高原	第45巻第3号	1989年3月	村松武司	自己への合体のために	藤田三四郎著『方舟の襪』出版特集。
268	高原	第45巻第4号	1989年4月	村松武司	夢の中の哀切	
269	高原	第45巻第5号	1989年5月	村松武司	親子の詩	
270	高原	第45巻第6号	1989年6月	村松武司	恩赦対象ほか	
271	高原	第45巻第7号	1989年7月	村松武司	「昭和」を終る三篇	
272	高原	第45巻第8号	1989年8月	村松武司	理屈でない説得性	
273	高原	第45巻第9号	1989年9月	村松武司	分身と民衆の意識	
274	高原	第45巻第10号	1989年10月	村松武司	教養講座・朝鮮の獄一獄を超えるはなし	日時の記載がないが、6月10日…9月号「園内日誌（六月）」に記事あり。
275	高原	第45巻第10号	1989年10月	村松武司	闇の中の花とはなにか	
276	高原	第45巻第11号	1989年11月	村松武司	煙を嗅ぎわかる感覚	
277	高原	第45巻第12号	1989年12月	村松武司	極微なもの偉大	
278	高原	第46巻第1号	1990年1月	村松武司	訴えと呼びかけ	
279	高原	第46巻第2号	1990年2月	村松武司	「急ぐなかれ」	
280	高原	第46巻第3号	1990年3月	村松武司	余裕とユーモア	
281	高原	第46巻第4号	1990年4月	村松武司	延命と老人の死	
282	高原	第46巻第5号	1990年5月	村松武司	詩のはじまり	
283	高原	第46巻第6号	1990年6月	村松武司	若さと老い	
284	高原	第46巻第7号	1990年7月	村松武司	笛を鳴らす胸	
285	高原	第46巻第8号	1990年8月	村松武司	別れの作品ほか	
286	高原	第46巻第9号	1990年9月	村松武司	自問自答	
287	高原	第46巻第10号	1990年10月	村松武司	盲人の時計とテレビ	
288	高原	第46巻第11号	1990年11月	村松武司	生の証明	
289	高原	第46巻第12号	1990年12月	村松武司	盲人と観察	
290	高原	第47巻第1号	1991年1月	村松武司	旅の前日に	
291	高原	第47巻第2号	1991年2月	村松武司	詩の人間味	
292	高原	第47巻第3号	1991年3月	村松武司	優と勇	
293	高原	第47巻第4号	1991年4月	村松武司	笑われたって	
294	高原	第47巻第5号	1991年5月	村松武司	音の世界をさがす	
295	高原	第47巻第6号	1991年6月	村松武司	死への情熱など	
296	高原	第47巻第7号	1991年7月	村松武司	腰を据えた作品	
297	高原	第47巻第8号	1991年8月	村松武司	老境次第	
298	高原	第47巻第9号	1991年9月	村松武司	冥土の結婚など	
299	高原	第47巻第10号	1991年10月	村松武司	印象的な「忘れ物」	
300	高原	第47巻第11号	1991年11月	村松武司	見えない何者か	
301	高原	第47巻第12号	1991年12月	村松武司	詩とは？書くとは？	
302	高原	第48巻第1号	1992年1月	村松武司	記述的ではなく	
303	高原	第48巻第2号	1992年2月	村松武司	評	大江満雄の訃報に触れる。
304	高原	第48巻第3号	1992年3月	村松武司	静かな口調	
305	高原	第48巻第4号	1992年4月	村松武司	柿の実とことば	
306	高原	第48巻第5号	1992年5月	村松武司	メッセージの詩	
307	高原	第48巻第6号	1992年6月	村松武司	与えられた人生、またはやってくる生命	
308	高原	第48巻第7号	1992年7月	村松武司	詩と青春	

309	高原	第 48 卷第 8 号	1992 年 8 月	村松武司	気配を知る	
310	高原	第 48 卷第 8 号	1992 年 8 月	村松武司	評	
311	高原	第 48 卷第 9 号	1992 年 9 月	村松武司	選評	
312	高原	第 48 卷第 10 号	1992 年 10 月	村松武司	揺れるは赤いカンナ	
313	高原	第 48 卷第 11 号	1992 年 11 月	村松武司	詩の成立	
314	高原	第 48 卷第 12 号	1992 年 12 月	村松武司	四篇共有の深さ	